

北野散布地(第5次)
西田原上野田遺跡(第4次)
西光寺中遺跡(第1次)

北野散布地(第5次)
西田原上野田遺跡(第4次)
西光寺中遺跡(第1次)

2020年3月

2020年3月

福崎町教育委員会

福崎町教育委員会

北野散布地(第5次)

西田原上野田遺跡(第4次)

西光寺中遺跡(第1次)

2020年3月

福崎町教育委員会

あ い さ つ

近年、福崎町内では宅地造成や店舗新築工事、高岡福田地区のほ場整備事業など、多くの開発が行われています。これらの事業に伴い、埋蔵文化財の調査も増加傾向にあります。

このたび、平成29年度、30年度に実施した民間開発に伴う本発掘調査の報告書を刊行することになりました。

それぞれの成果から、改めて身近な地域の文化財を認識していただき、資料としてひろく活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査においては関係各位のご協力をいただきましたこと、厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

福崎町教育委員会
教育長 高寄十郎

例 言

1. 本書は、平成29・30年度に行った発掘調査報告書である。
2. 調査は事業主の依頼を受け、福崎町教育委員会を主体とし実施した。
3. 確認調査は国庫補助金を充て、本調査経費は事業主体者が負担した。
4. 各年度の調査体制は以下のとおりである。

平成29年度 平成30年度

調査・管理事務局		整理作業・報告書担当
教 育 長 高寄十郎	教 育 長 高寄十郎	社会教育課主査 樋口 碧
社会教育課長 大塚久典	社会教育課長 大塚久典	埋蔵文化財調査専門員 渡辺 昇
社会教育課副課長 福永知美	社会教育課課長補佐 中塚喜博	整 理 作 業 員 梶 智美
社会教育課主査 樋口 碧	社会教育課主査 長谷川幸子	整 理 作 業 員 福永明子
	社会教育課主査 樋口 碧	整 理 作 業 員 原井川奈美

5. 本書に使用した方位は、基本的に磁北を示している。
6. 本書に掲載した図のうち、遺跡位置図は福崎町発行の都市計画図を編集したものである。
7. 本書の執筆、編集は梶、福永の協力を得て樋口、渡辺が行った。
8. 出土遺物の整理は梶、福永が行い、写真撮影は樋口、渡辺が行った。
9. 本報告に係る図面、写真、遺物等は福崎町教育委員会にて保管している。
10. 調査及び整理作業には、数多くの方々や機関にご指導、ご助言をいただいた。感謝申し上げる。

卷頭図版 1



北野散布地第5次調査 全景（南から）



北野散布地第5次調査 SH02（北東から）

卷頭図版 2



北野散布地第5次調査 SHO1 (北東から)



P01 土器出土状態 (東から)



P12 土器出土状態 (南から)



北野散布地第5次調査 出土遺物

卷頭図版 3



西田原上野田遺跡第4次調査 調査区遠景（北上空から）



西田原上野田遺跡第4次調査 調査区遠景（東上空から）

卷頭図版 4



西田原上野田遺跡第4次調査 1区旧河道堆積状況



1区北側全景（東から）



SK 01（北から）



SK 01 土器出土状態（北から）



西田原上野田遺跡第4次調査 出土遺物

本文目次

あいさつ・例言

巻頭図版

I 北野散布地第5次調査

第1章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	3
第2章 調査の経緯	5
第3章 調査結果	7
第4章 出土遺物	12
第5章 小結	13

II 西田原上野田遺跡第4次調査

第1章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	17
第2章 調査の経緯	19
第3章 調査結果	21
第4章 出土遺物	30
第5章 小結	32

III 西光寺中遺跡第1次調査

第1章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	35
第2章 調査の経緯	36
第3章 調査結果	38
第4章 小結	39

図 目 次

図 1 福崎町の位置	iv
図 2 調査地位置図	iv
図 3 上大明寺遺跡竪穴住居	3
図 4 宮山遺跡土器棺	3
図 5 妙徳山古墳石室	4
図 6 北野散布地周辺の遺跡分布図	4
図 7 確認調査坪配置図	5
図 8 確認調査坪実測図	6
図 9 本調査区の位置	7
図 10 調査風景	8
図 11 調査区平面図	9
図 12 SH 01・02実測図	10
図 13 SB 01・ピット実測図	11
図 14 SA 01・02実測図	12
図 15 出土遺物実測図	13
図 16 SH 02実測風景	14

図1 7	南田原桶川遺跡墨書き土器	1 7
図1 8	西田原上野田遺跡周辺の遺跡分布図	1 8
図1 9	大門岡ノ下遺跡竪穴住居	1 8
図2 0	大門岡ノ下遺跡出土遺物	1 8
図2 1	南田原条里遺跡掘立柱建物	1 8
図2 2	南田原条里遺跡D-9区全景（北から）	1 8
図2 3	確認調査坪配置図	1 9
図2 4	確認調査坪実測図	2 0
図2 5	本調査区の位置	2 1
図2 6	1区平面図	2 2
図2 7	1区遺構実測図（1）	2 4
図2 8	1区西側空中写真	2 5
図2 9	1区遺構実測図（2）	2 6
図3 0	1区遺構実測図（3）	2 7
図3 1	2区実測図	2 8
図3 2	3区実測図	2 9
図3 3	3区SB01実測図	2 9
図3 4	遺物実測図	3 1
図3 5	實性院石棺	3 5
図3 6	西光寺中遺跡周辺の遺跡分布図	3 6
図3 7	試掘調査トレッソ配置図	3 7
図3 8	本調査区の位置	3 7
図3 9	試掘調査実測図	3 7
図4 0	本調査実測図	3 9

図 版 目 次

- 卷頭図版1 上 北野散布地第5次調査 全景（南から）
 下 北野散布地第5次調査 SH02（北東から）
- 卷頭図版2 上 北野散布地第5次調査 SH01（北東から）
 中 北野散布地第5次調査
 P01土器出土状態（東から）・P12土器出土状態（南から）
 下 北野散布地第5次調査 出土遺物
- 卷頭図版3 上 西田原上野田遺跡第4次調査 調査区遠景（東上空から）
 下 西田原上野田遺跡第4次調査 調査区遠景（南上空から）
- 卷頭図版4 上 西田原上野田遺跡第4次調査 1区旧河道堆積状況
 中 西田原上野田遺跡第4次調査
 1区北側全景（東から）・SK01（北から）
 SK01土器出土状態（北から）
 下 西田原上野田遺跡第4次調査 出土遺物

- 図版 1 北野散布地確認（第4次）調査
図版 2 北野散布地確認（第4次）調査
図版 3 北野散布地第5次調査 上：全景（北から） 下：全景（南から）
図版 4 北野散布地第5次調査
図版 5 北野散布地第5次調査
図版 6 北野散布地第5次調査
図版 7 北野散布地第5次調査
図版 8 北野散布地 出土遺物
図版 9 西田原上野田遺跡第3次調査
図版 1 0 西田原上野田遺跡第3次調査
図版 1 1 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 1 2 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 1 3 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 1 4 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 1 5 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 1 6 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 1 7 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 1 8 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 1 9 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 2 0 西田原上野田遺跡第4次調査 上：空中写真 下：1区空中写真（北東上空から）
図版 2 1 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 2 2 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 2 3 西田原上野田遺跡第4次調査
図版 2 4 西田原上野田遺跡 出土遺物
図版 2 5 西田原上野田遺跡 出土遺物
図版 2 6 西光寺中遺跡第1次調査

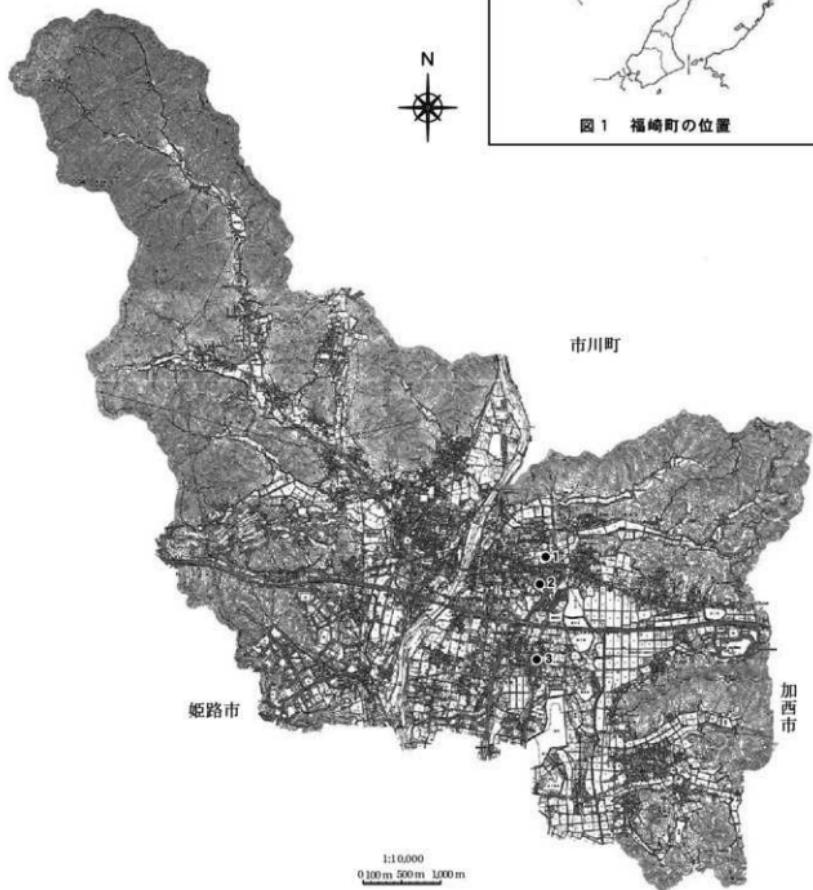


図2 調査位置図

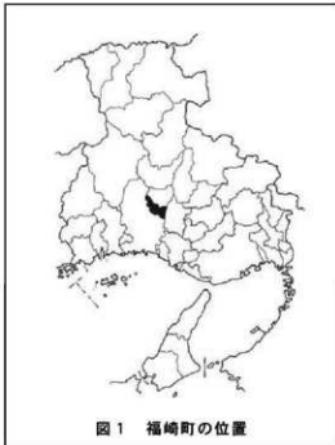


図1 福崎町の位置

I 北野散布地第5次調査

第1章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

当該地は、市川東岸に位置し、市川ならびに支流である雲津川によって形成された段丘面にあたる。調査の結果、北西部には礫層が出ていることからも北西から南東に向けて大きく傾斜していた地形であることがうかがえる。水田開発によって段丘面の高い部分が削平されたと思われる。

第2節 歴史的環境

弥生時代の遺跡である上大明寺遺跡（4）からは竪穴住居が検出され、ガラス玉や未製品の石器が出土しているほか、辻川山山麓（宮山遺跡）から弥生時代中期の壺棺が出土している。上大明寺遺跡から播但連絡道路を挟んで西に位置する北野寺西遺跡（18）では円形周溝墓が検出されており、壺棺を含め、上大明寺遺跡の墓域の可能性がある。西広畑遺跡（5）では方形と考えられる竪穴住居が検出され、どちらも弥生時代後期まで続く遺跡である。

古墳時代の集落遺跡では、上大明寺遺跡、加治谷戸下五反田遺跡（24）があり、いずれも竪穴住居が検出されている。加治谷戸下五反田遺跡のものはカマドを伴う。

町内の古墳では、市川東岸の雲津川流域では、丘陵上にピワクビ群集墳が所在しており、石材が確認される1号墳（22）は片袖式の横穴式石室を有するが、2号墳（23）については主体部は確認されていない。妙徳山に所在する妙徳山古墳（20）は、神崎郡でも最大級の石室を有する円墳である。谷川の南岸には東広畑古墳（8）、東新田古墳（9）、北岸には大畑古墳群（11～14）、尾森古墳（16）が所在している。いずれも横穴式石室である。東広畑古墳、東新田古墳からは鉄剣、鉄刀、馬具、鉄鎌などの鉄製品のほか耳環、勾玉、管玉などの装身具が出土している。時期は6世紀後半である。東広畑古墳に関しては、中世の2次利用があったようで、須恵器椀などが前庭部から出土した。大門池ノ下古墳は町内最大級の大きさであったと伝わるが、県道工事により消滅している。

谷川の北岸の尾根筋に位置する池ノ谷中池遺跡（15）からは灰原と思われる黒色シルト層から須恵器がコンテナ2箱分検出されており、時期は6世紀末から7世紀初頭のものである。近接する大畑古墳群等に須恵器を供給していた可能性がある。



図3 上大明寺遺跡竪穴住居



図4 宮山遺跡土器棺

北野散布地（1）は平成8年度に分布調査が実施され、広い範囲で遺物が採集され、濃密な遺物分布が確認された。当該地もその時に遺物が採集されている。須恵器・土師器が多く、古代を中心とする遺跡と思われていた。第1次調査では遺物は出土したが明確な遺構は確認されなかった。



図5 妙徳山古墳石室

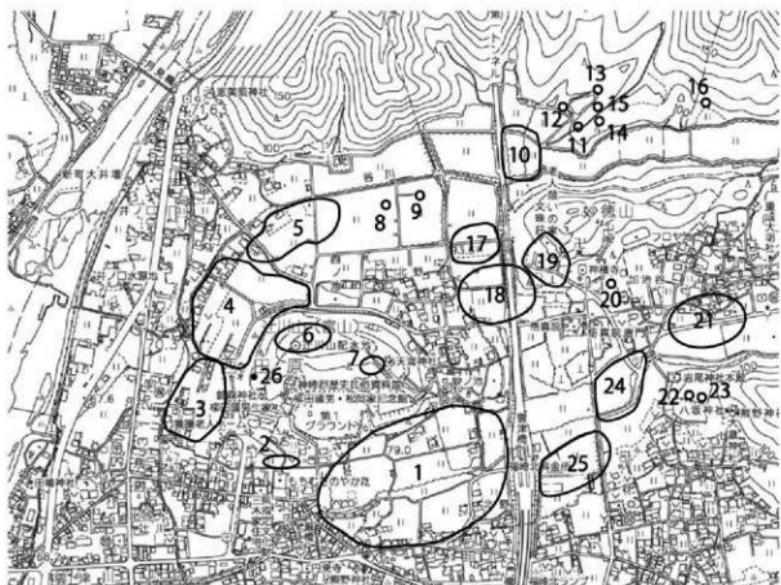


図6 北野散布地周辺の遺跡分布図

1	北野散布地	8	東広畑古墳	15	池ノ谷中池遺跡	22	ビワクビ1号墳
2	上坂遺跡	9	東新田古墳	16	尾森古墳	23	ビワクビ2号墳
3	下大明寺遺跡	10	西田原穴田遺跡	17	北野寺山西遺跡	24	加治谷戸下五反畑遺跡
4	上大明寺遺跡	11	大畑1号墳	18	北野寺西遺跡	25	大門岡ノ下遺跡
5	西広畑遺跡	12	大畑2号墳	19	妙徳山遺跡	26	宮山遺跡
6	西広岡遺跡	13	大畑3号墳	20	妙徳山古墳		
7	北広岡遺跡	14	大畑4号墳	21	加治谷前田遺跡		

表1 遺跡地名表

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

①開発計画

北野散布地内では、個人住宅及び集合住宅の計画があり遺跡の南東部（第1次調査）、北部（第2次調査）、西部（第3次調査）でそれぞれ確認調査が実施されている。どの調査区からも顕著な遺構は確認されていない。

遺跡の大半は水田等であるが、近年遺跡の端部から周辺部で開発等の計画が進みつつある地区である。

②確認調査

平成29年2月1日（水）に集合住宅新築工事に伴って、周知の埋蔵文化財包蔵地である北野散布地であることから、発掘届出が提出された。平成29年4月12日（水）に確認調査（第4次調査）を行ったところ遺構が検出されたので、遺跡に影響のある建物建設予定地部分について本発掘調査が必要であると判断した。

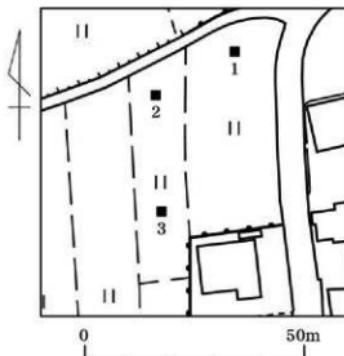


図7 確認調査坪配置図

第2節 調査の経過

確認調査の結果に基づき事業主と協議を行ったところ、工事着手を急ぐとのことで事業主が業者発注し、教育委員会が指導しながら調査を実施するという方法を探った。平成29年4月25日（火）～28日（金）、5月11日（木）の4日間で本発掘調査を実施した。

本発掘調査は、周辺の水田に水を入れるまでに終了することを前提にして開始した。隣地との境界から約1m開けて南側から機械掘削を実施した。包含層直上まで機械掘削し、終了した部分から人力掘削を行った。地山面で遺構検出することとし、包含層を下げつつ面精査を行った。検出順に遺構番号を与え、遺構の掘り下げを行い、写真・実測作業を行った。全景写真・平面図作成し、ピットなどの断割り作業を行って、調査を終了した。

その後調査区西側の擁壁工事施工に合わせて未調査だった幅1mについて5月11日に調査を実施した。堅穴住居の切り合いが確認され、平面図を追加し調査終了した。

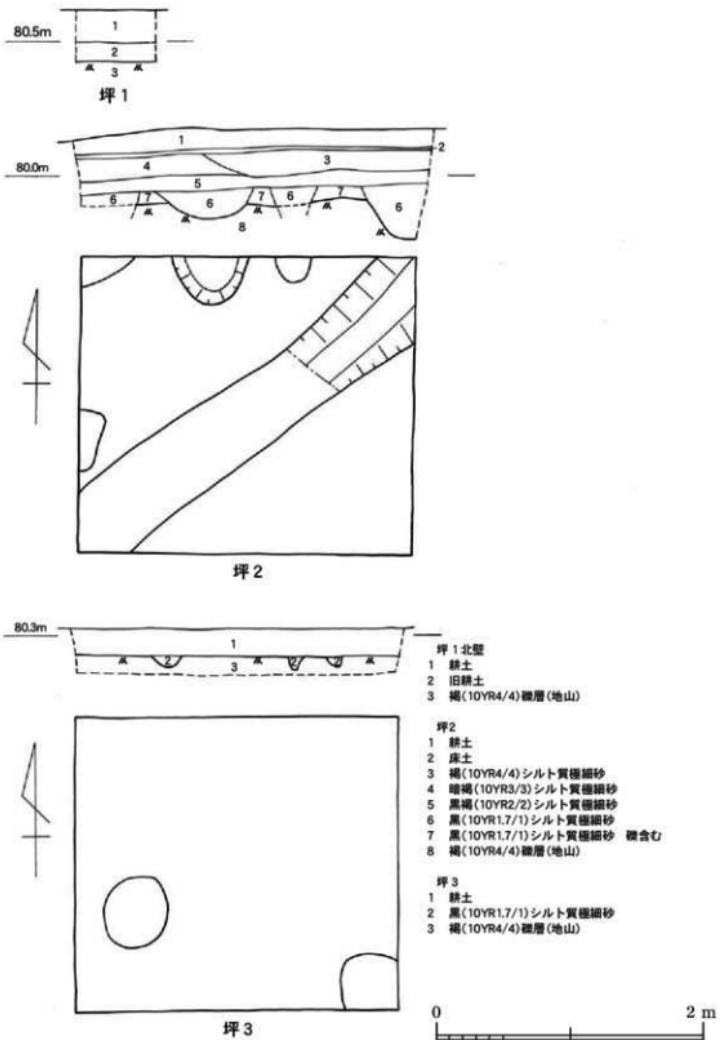


図8 確認調査坪実測図

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

第3次調査結果をもとに事業主と協議をし、掘削を伴う建物建築部分について本発掘調査を実施した。調査面積は250 m²である。発掘調査については福崎町教育委員会が調査主体となり、事業主から工事業者が作業委託を受け実施した。

確認調査結果を踏まえて上層については機械掘削により除去し、包含層・遺構面については人力により対応した。

基本層序は、第1層が耕土、第2層は黒褐シルト質極細砂、第3層は地山で褐砂砾である。調査区内の多くは耕土直下が地山となっていた。

第2節 遺構

検出した遺構は竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、柵跡2列、ピット・土坑である。竪穴住居2棟は調査区南西部で検出しており、調査区外西側に延びている。2棟は切り合い関係にあり、壁溝とピット・土坑を検出している。壁はほとんど残っておらず、残存状態は良好とは言えない。南側の方をSH01とし、北側の方をSH02とする。SH01が新しいと考えている。

竪穴住居SH01 残存長2.3 mの弧状に検出しており、復元すると直径5 m前後の円形住居になる。壁溝は幅0.22～0.3 m、深さ0.08～0.12 mを測る。断面形状は底面が少し平たくなるU字形である。壁溝の北側は新しい時期の土坑に切られている。住居面に4基のピットを確認したが柱穴になるか不明である。西壁沿いの土坑もSH01に伴う遺構か断定は出来ない。

竪穴住居SH02 3条の壁溝を検出している。外側2条はともに弧を描き、円形住居の建て替えと思われる。外側の壁溝は径7.4 mに復元され、内側の壁溝は径6.0 mに復元される。内側から外側へ住居が拡張されたと思われる。最大0.08 m壁が残っているが僅かで残存度は低い。幅は外側の方が0.16～0.2 mと狭く、内側は最大0.3 mと広くなっている。深さはほぼ同じで0.08～0.1 mである。床面に4基のピットを検出している。南側にあるピットは径0.3 mで深さ0.56 mを測り、柱穴と思われる。内側の壁溝は直線的に延びており、切り合い関係から最も新しいことがうかがわれる。面的に調査していないことや時期差を示す遺物が出土していないことから、断定は出来ないが時期の下る方形住居と思われる。方形住居とすると南北に短い東西方向の溝が検出されており、これを南北の壁溝と考えると南北5.0 mの規模になる。壁は全く残存しておらず、柱穴も不確実である。

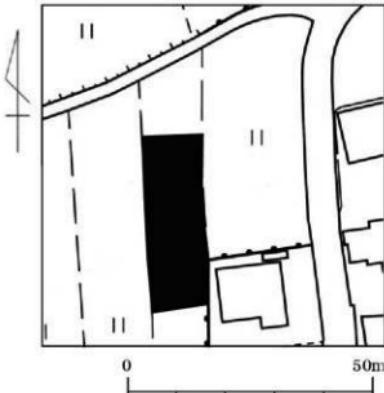


図9 本調査区の位置

掘立柱建物 SB01 調査区南東で確認した。調査区東へ延びている。南北3間、東西1間以上の建物である。調査した規模は南北6.7m（柱間の心々間距離は北から2.2m、2.3m、2.2m）、東西は3.0m（東西間中央にピットがあるが、埋土の違いからSB01の柱穴ではないと考えている）を測る。主軸方向はN25°Wである。柱間の違いから南北方向が平行と考え南北棟と思われる。柱穴の径は0.35～0.45mで柱痕跡の径は0.2mである。深さは北西隅の柱穴が最も深く0.35mを測る。他は0.2～0.3mで、柱の建て替えは認められない。

柵跡 2列確認している。SA01はSB01と同じN25°Wを主軸方向に採る。2間5mを測る短い柵である。SB02は調査区北西部で検出した。主軸方向は正方向に近いN4°Eで、4間10mを測る。柱間は北から4.0m、2.1m、1.8m、2.1mである。径は北端が0.5mと大きく、それ以外は0.4mである。

それ以外に土坑・ピットを検出している。土坑は性格のわかるものではなく、遺物も出土していない。調査区西側に集中している。幾つかのピットからは土器が出土している。調査区中央に近いところで検出したP01はピット底から浮いた位置に自然石を配置し、その上に3個の土師器碗を置いている。ロクロナデが顯著な碗で9世紀末～10世紀初頭と思われる。礎板とした石材を入れていることから、平安時代初頭の掘立柱建物が存在したものと思われる。調査区北西隅で検査したP12は3個体の弥生時代末の土器が出土している。高杯と鉢・甕で、出土状況から高杯の上に鉢を置いたと思われる。

堅穴住居・掘立柱建物など大半の遺構は弥生時代末の遺構と考えられる。SA02は主軸方向を変えていることから、P01に近い時期（平安時代初頭頃）を想定している。他に古墳時代・奈良時代の遺物も少量ながら出土しているので、弥生時代後半から平安時代まで継続する遺跡と考えられる。



図10 調査風景

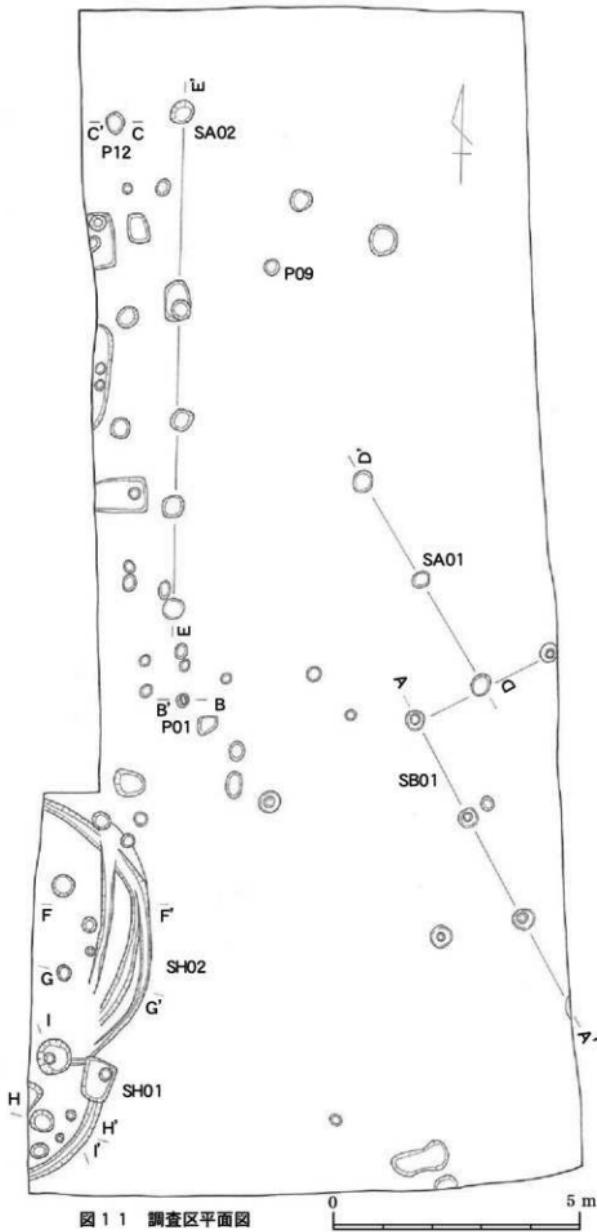


図 11 調査区平面図

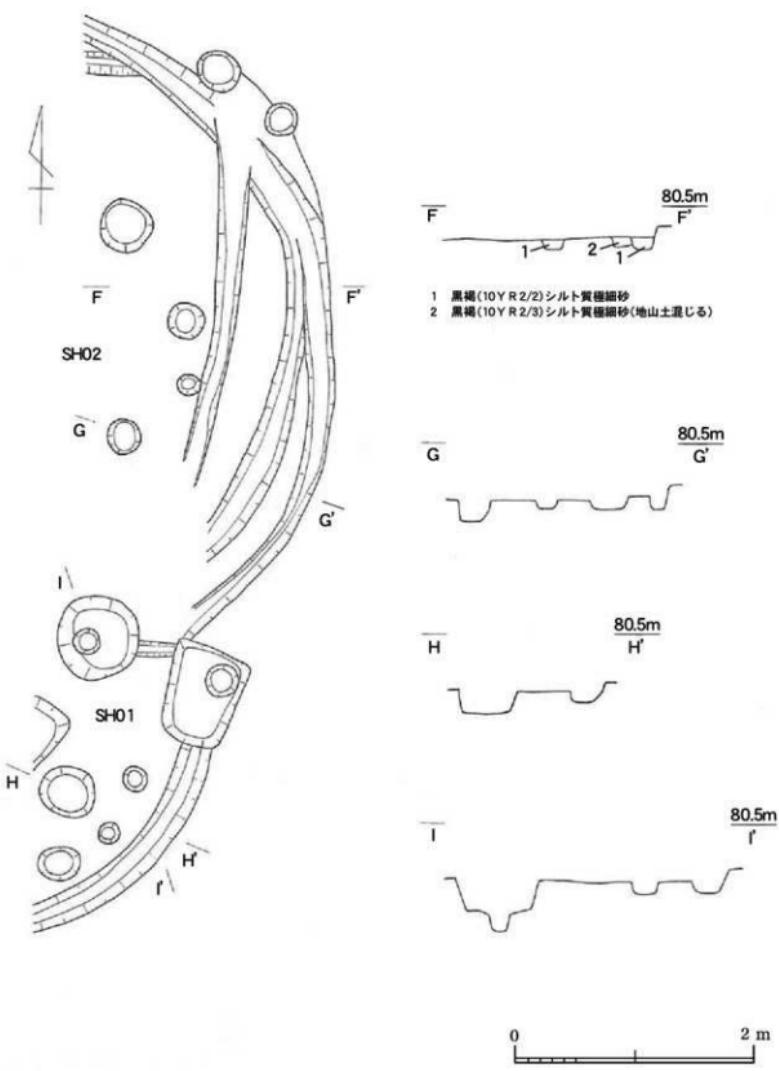


図12 SH01・02実測図

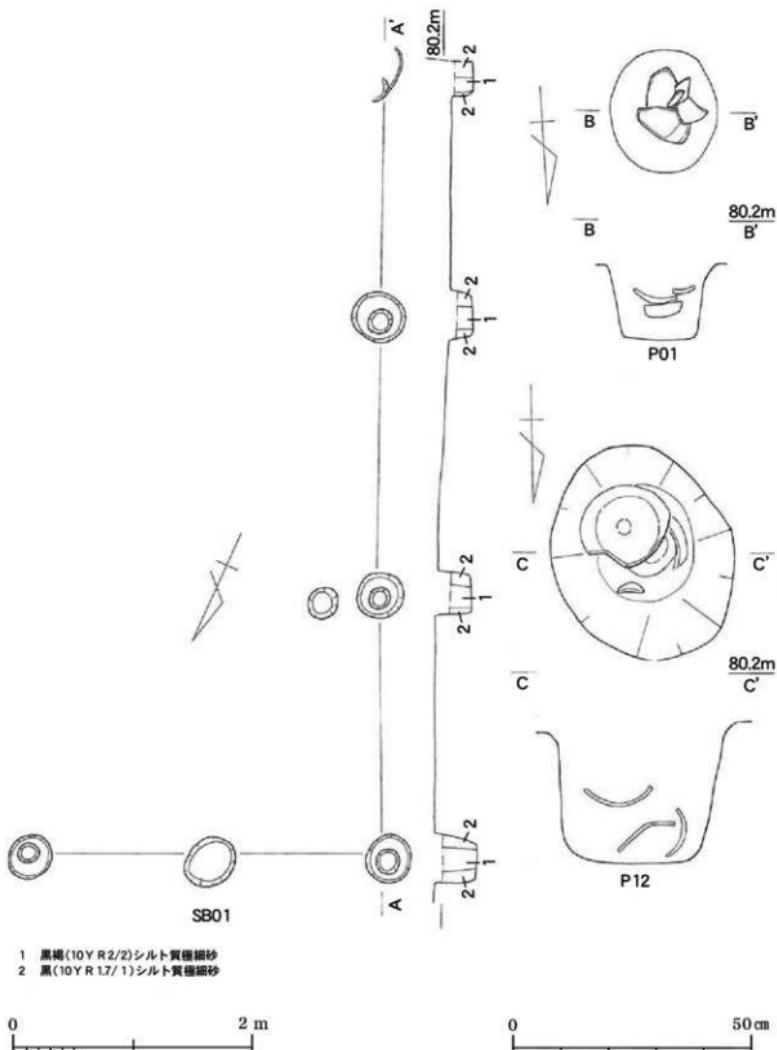


図 13 SB01・ピット実測図

SA01



SA02



図14 SA01・02実測図

第4章 出土遺物

出土遺物はコンテナ3箱と多くはない。弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器であるが、図化した点数は8点である。

1～3はP12から出土した弥生土器である。1は鉢で突出平底から内湾する体部になり、口縁部も内湾し端部は丸く納める。端部周辺はヨコナデを施す。外面は右上がりの平行タタキ成形から縦方向にヘラ状工具でナデ整形している。底部は再成形でタタキの痕跡が側面に見られナデ整形している。底面もナデ仕上げである。内面は粗いハケ整形からナデ仕上げを行う。内面に黒斑が見られる。外面に粘土紐の継ぎ目が看取されるが全体的に丁寧な作りである。2は甕底部で、平底であるが中央が上がっている。磨滅しているが、外面はタタキのちハケ整形している。内面はユビ整形で、底面はハケ整形と思われる。長胴の器高の高いV様式甕になろうと思われる。3は高杯で裾部は外湾し端部は角張るが下端をつまみ出している。内面はナデ、外面はヘラミガキを行っている。円形透孔を有する。杯部は楕形で内湾する下半から稜線を持って外反する口縁部に続く。端部は丸く尖り気味である。内外面ともにヘラミガキを施す。胎土には砂粒をやや多く含む。

4・5は丸底の甕底部でP9出土である。1～3に比べると新しく古墳時代初頭～前期かと思われる。4は内外面ともハケ整形、5は内面にくもの巣状のハケが見られる。磨滅しているが外面の整形はナデであろうか。

6はP7出土の甕口縁部小片でくの字に外傾し端部は上方につまみ上げ、端面が凹線状になっている。内面の稜線は甘く、口縁部はヨコナデである。ハケ整形のちナデ仕上げである。5よりも新しい古墳時代前期と思われる。

7は包含層出土である。上げ底の甕底部で底部をユビ成形で上げ底にしたのちナデで仕上げている。

外面と底面にはコビ痕跡が残るが、内面は丁寧な仕上げである。底径が小さめで低いことから、台付き鉢の可能性も残される。

8は平安時代の回転台土師器椀である。不安定な平底から外傾する体部で端部は反り気味で丸い。口径15.7cmと大きめで浅い椀である。ロクロ痕跡が明瞭である。同タイプ・同形状と思われる土師器椀が他に2点出土している。図化できなかったが、類似したものである。

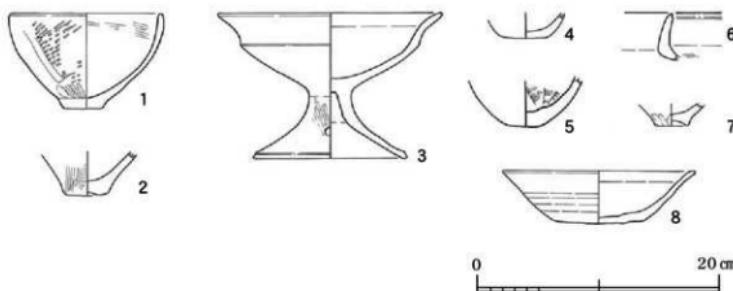


図15 出土遺物実測図

番号	種別	器種	遺構	法量(cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
1	弥生土器	鉢	P12	12.2	7.8	3.2	タタキののち ヘラナデ	ハケメ	
2	弥生土器	甕	P12		残3.6	3.6	タタキののち ハケメ	ユビオサエ	
3	弥生土器	高杯	P12	18.4	11.8	12.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
4	土師器	甕	P9		残2.1	4.1	ハケメ	ハケメ	
5	土師器	甕	P9		残4.1	3.1	ナデ	ハケメ	
6	土師器	甕	P7		残3.8		ハケメ		
7	弥生土器	甕	包含層		残1.9	2.5	ユビオサエ		
8	土師器	椀	P1	15.7	4.3	7.7	ロクロナデ	ロクロナデ	

表2 遺物観察表

第5章 小結

今回の調査では、弥生時代後期から平安時代までの遺構が確認された。弥生後期は竪穴住居と掘立柱建物の両者が確認された。掘立柱建物は調査区外に延びているが、側柱建物の可能性が高く倉庫ではないと思われる。竪穴住居と掘立柱建物の両者が共存していることが判明した意義は高い。時期は弥生後期後半で、隣接する上大明寺遺跡と同時期である。上大明寺遺跡は前代弥生時代中期後半から継続する遺跡であるが、後期前半に断続している可能性がある。再び生活をはじめたのが後期後半で、この時期に盛期を迎えていたように思われる。今回調査した地点も同時期で辻川山西麓から南側にかけて集落が栄えたようである。周辺の宮山遺跡や上坂遺跡、今回合わせて報告する南東に位置する西田原上野田遺跡も近い時期の集落であり、福崎盆地で後期後半に集落が増加することになる。それ以降集落が継続しないものも共通しており、この地域の特徴かもしれない。断続する後期前半は上大明寺遺跡より一段高い宮山遺跡と辻川山西麓の西広畑遺跡で痕跡が確認されており、中期末前後の洪水などにより居住域移動の可能性が推定される。後期後半に元の居住域を中心に生活圏を拡大したものと思われる。

P 0 1だけ時期が異なっている。回転台土師器 3 点をピットの中に納めた遺構である。淡路などでよく見られる遺構で、地鎮などの可能性の高い祭祀遺構である。そう考えた場合、P 0 1はSA 0 2の延長上にあり、他の例も延長上か隅柱で皿・椀を埋納する行為が一般的である。SA 0 2は掘立柱建物の東辺と考えられ、西側に延びる南北棟となる側柱建物の可能性が高いと思われる。



図 16 SHO 2 実測風景

II 西田原上野田遺跡第4次調査

第1章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

当該地は市川東岸に位置し、地形区分上は中位と低位の段丘面と氾濫原にあたる。西田原から南田原にかけての段丘面・氾濫原は現況では起伏があまり認められないが、旧河道や微高地が複雑に存在しているようである。洪水によって多くの遺物が広範囲に分布している。

第2節 歴史的環境

旧石器時代の遺構は確認されていないが、南田原桶川遺跡（5）から旧石器時代のナイフ型石器が確認されている。縄文時代の遺構は周辺では確認されておらず、弥生時代になると、南田原条里遺跡（4）や北野散布地（7）で遺構が確認されている。南田原条里遺跡では、第21次調査で溝状遺構が確認され、壺やミニチュア土器が出土した。弥生時代後期のものと考えられる。北野散布地は平成8年度に分布調査が実施され、弥生時代から中世の散布地として知られていたが、第5次調査で弥生時代後期後半の掘立柱建物や竪穴住居が確認された。古墳時代の遺跡は北野散布地より北側に広がっている。

西田原前田遺跡（2）、西田原辻ノ前遺跡（3）、南田原条里遺跡（4）、南田原桶川遺跡（5）から奈良時代、平安時代の遺構が確認されている。西田原前田遺跡では、店舗建築工事に伴う確認調査（第1次調査）を実施したところ、平安時代から中世の土器片が検出された。西田原辻ノ前遺跡では、第2次調査で奈良時代の土坑やピットが検出されている。南田原条里遺跡では、第22、23次調査で奈良時代の溝状遺構が確認され、須恵器が出土している。また、第40次調査では奈良時代の掘立柱建物が確認されている。須恵器や稟椀、製塙土器等が出土しており、官衙的遺構であると考えられる。南田原桶川遺跡では、遺跡の北西部の調査で包含層から奈良時代の須恵器が出土している。また、周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、西田原前田遺跡と西田原辻ノ前遺跡の間で試掘調査を実施したところ、古墳時代から中世と幅のある時期の土器片が出土している。

中世になると、周辺の遺跡全てから土器片が確認されている。南田原桶川遺跡からは掘立柱建物や溝が確認され、龍泉窯系の陶磁器や墨書き土器の存在が注目される。

このように、古墳時代までは段丘上に生活していた人々が、奈良時代以降に低位段丘上や氾濫原へと生活の場を広げている様相が読みとれる。



図17 南田原桶川遺跡墨書き土器

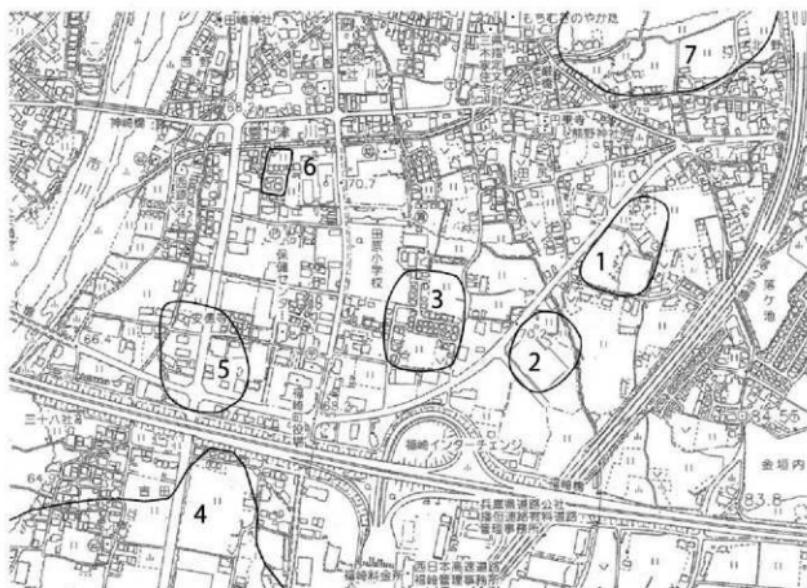


図 18 西田原上野田遺跡周辺の遺跡分布図

1	西田原上野田遺跡	2	西田原前田遺跡	3	西田原辻ノ前遺跡	4	南田原条里遺跡
5	南田原桶川遺跡	6	西田原堂ノ前遺跡	7	北野散分布地		

表 3 遺跡地名表

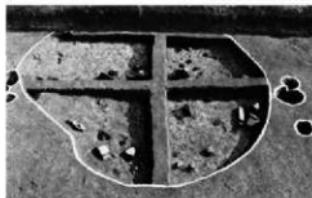


図 19 大門岡ノ下遺跡竪穴住居



図 20 大門岡ノ下遺跡出土遺物



図 21 南田原条里遺跡掘立柱建物



図 22 南田原条里遺跡D-9区全景(北から)

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

①開発計画

福崎町役場から播但自動車道までの県道周辺は宅地開発が進んでいる。商業施設や宅地造成など農地転用が増加している。今回も宅地造成が計画され、遺跡照会があった。開発予定地の南西側が周知の埋蔵文化財包蔵地である西田原上野田遺跡にかかり、全体に遺跡の可能性の高い段丘面であることから確認調査の必要がある旨回答した。平成29年11月13日付けで施工主体者から、周知の埋蔵文化財包蔵地における開発事業にかかる発掘届出書が提出された。それを受け平成29年12月11日（月）に確認調査を行った。

②確認調査

平成29年12月11日（月）に確認調査を実施した。開発予定地に5か所の坪を設定した。 $2 \times 2\text{ m}$ の4m²の坪で、機械掘削により掘り下げ、断面などの精査は人力で行った。記録作成後、埋戻しも行った。

坪1は北東部に設定した坪で、層序は耕土、床土、黒褐粗砂、灰オリーブ細砂、地山となっている。水平堆積で安定した面は確認していない。第3層から土師器片が出土したが、遺構は確認していない。

坪2は南側に設定した坪で、耕土、床土、暗褐粗砂、黒シルト質細砂、暗オリーブ褐細砂、地山となっている。黒シルト質細砂から弥生土器・土師器が出土している。やや磨滅していた。自然堆積と思われる落ち込みを確認した。

坪3は坪1と坪2の間に設定した。坪2で落ち込みを検出したことから、遺構の広がりを確認するためである。層序は坪2に近いが5層の暗オリーブ褐細砂が存在せず、黒褐細砂になっている。4層から土師器が出土したが、遺構は確認されなかった。地山も灰色がかっており低湿地に近い様相を示しているので、坪2の遺構は自然堆積の可能性が高いと判断し本発掘調査範囲から除外した。

坪4は中央付近に設定した坪で、層序は耕土、床土、黄褐シルト質極細砂、地山となっている。地山面でピットを検出した。遺物は耕土から須恵器が出土しただけであるが、ピットは明瞭な遺構であった。

坪5は北西部に設定した坪で、層序は耕土、床土、黒シルト質細砂、地山となっている。遺物は黒細砂から土師器が出土している。遺構は地山面でピット・土坑を4基確認した。

確認調査の結果、西半分には遺構が確認され、遺跡が存在することが明らかとなった。宅地部分は0.8m前後の盛土を施工するので、遺跡保護がなされるものと思われる。掘削を伴う部分と道路部分については本発掘調査が必要と考えられた。



図23 確認調査坪配置図

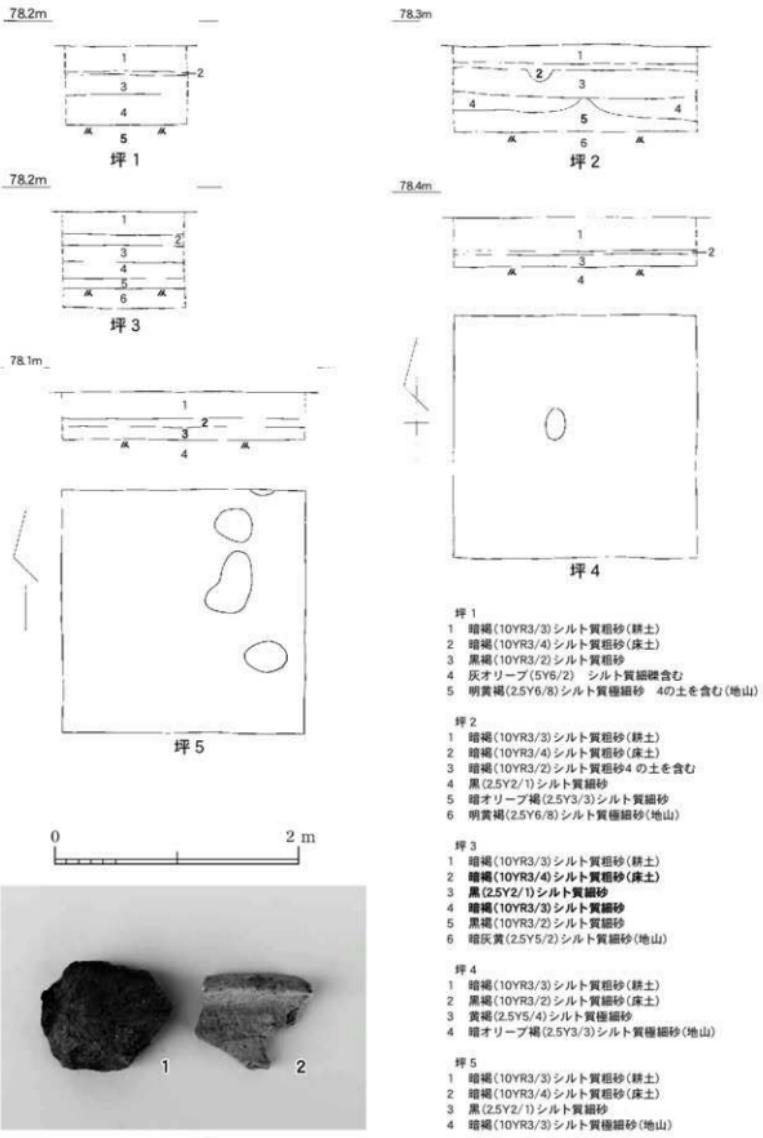


図 2.4 確認調査坪実測図

第2節 本発掘調査の経過

①調査の方法

調査対象地区の地目は、水田・畑地である。里道・水路も伴っており、一部休耕しているところや作業倉庫が置かれているところもある。掘り下げは重機を用い、包含層の掘り下げと精査においては人力により対応した。壁面の図化、写真撮影による記録を適宜行ったのち、埋戻し作業も実施した。

道路部分を対象としたが、現在使用されている水路や里道があり、その部分については調査を行っていない。また、一部農作物が残っている部分もあり、そこは調査を行っていない。現状で可能な範囲を調査することにしたため、未調査地を残している。調査区は面的に統いておらず、1～3区と分けて調査した。未調査地については後日立会調査を実施した。

②調査の経過

確認調査結果をもとに本発掘調査を実施した。調査は平成30年4月3日（火）から13日（金）まで実働9日間を費やした。3区合わせた調査面積は410 m²である。1区から調査に入り、2区、3区と引き続き行った。3区は水田の段差部分に位置し、間に水路があることから、遺構が残存すると思われる北側の高い水田だけを調査対象とした。

第3章 調査結果

〈層序〉

基本層序は1～3区ともほぼ同じである。耕土・床土・黒褐～暗褐細砂・地山になっている。深いところは床土と地山との間の層が増えている。遺構は地山面で確認している。

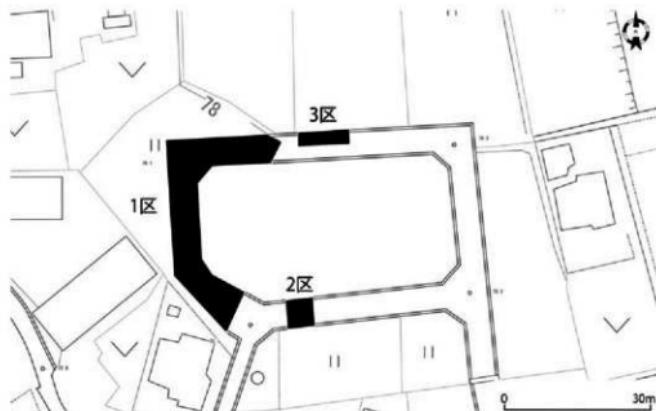


図25 本調査区の位置



図 2 6 1区平面図

〈1区〉

西側の最も広い調査区で362mを測る。ピット・土坑・落ち込み・溝・旧河道を調査した。遺構番号は通し番号にしている。

溝（SD）は14本と多く確認している。主軸方向はまちまちで、南北方向と北東から南西方向、北西から南東方向、東西方向がある。北東から南西方向に流れる溝が最も多い。切り合ひ関係が多くあり、複雑に流れがあったことがうかがわれる。直線的な形状の溝もあるが、大半は緩やかな弧を描いている。埋土は黒～黒褐シルト質極細砂で自然堆積である。底面に粗砂が堆積する溝もある。粗砂からは弥生時代末から古墳時代初頭の土器が出土しており、粗砂を有する溝は古墳時代初頭である。

自然流路（旧河道SR）は調査区北西隅で確認しており、調査区外へ延びている。北側から屈曲して西側に延びる流路で、最大幅2.6m、深さ0.7mを測る。底面には凹凸があり灰黄褐の粗砂が堆積している。その上に灰黄褐シルト質極細砂が堆積し、この2層は弥生時代末から古墳時代初頭の土器を含んでおり、自然流路の時期と考えられる。残存状態は悪いが植物遺体も出土している。埋土上層の黒褐シルト質極細砂には少量の古代の須恵器が認められ、その時期にも影響があったことがうかがわれる。

土坑（SK）は4基確認している。SK01は南北に細長い土坑で、長さ2.3m、最大幅0.65m、深さ0.25mを測る。端部は南側が丸く、北側が尖り気味の狭長な土坑である。長辺は直線でなく西辺側が凹んだ少し弧を描く緩やかな曲線である。断面形状は東西方向がU字形で、南北方向の肩は緩やかになっている。底面に2列の小さなピットが並んでいる。径0.06～0.14mで等間隔でなく並んでいる。土坑北側を中心に底には着かずには暗オリーブ褐シルト質極細砂層の上に土器が置かれていた。肩部とほぼ同じ高さの位置に土器は配置されている。壺・甕で煤が付着したものもあり、日常の土器である。古式土師器で古墳時代初頭の遺構である。SK03は南西部で調査した方形に近い不定形の土坑である。最大長1.0m、深さ0.15mを測る。埋土下半は地山土がブロックで混じる黒シルト質極細砂で人為的に埋められたと思われる。SK10・SK11は調査区中央付近にある小形の土坑である。不定形プランで遺物は出土していない。SK23は調査区北の道路部東端に位置する径0.65mの円形土坑である。深さは0.05～0.08mと浅い遺構である。

落ち込み（SX）は5基ある。SX04は調査区南西に位置する方形プランの落ち込みで、底に2本切断された柱が番線で繋がれた状態で出土している。長さ1.5m、幅0.75m、深さ0.8mを測り、肩部はほぼ直に掘り込んでいる。柱の上に黒シルト質極細砂を埋め、その上に黄シルトで埋めている。第2次世界大戦前の電柱を埋めた落ち込みと思われ、警察電話と伝えられている。戦後水田にする際に埋めて粘土を貼ったものと思われる。SX06は南西部に位置する大形の落ち込みで溝状を呈している。調査区東側に延びているが、幅を狭めており端部はあと少しかと思われる。西側端部は丸くなっている、南北の長辺は直線でなく弧状である。大きく3つの土坑が連結したような形状を示している。幅1.2mで、長さ4.0m以上、深さ0.5mである。SX24は調査区北の道路部東端にある円形の落ち込みである。径1.2mを測るが、深さは0.1mと浅い。SX25はSX24の東側にある最大長4.8mある不定形の落ち込みである。深さは0.05～0.1mと浅く、埋土は黒シルト質極細砂で遺物は出土していない。SX30は北側道路の中央北側に存在し、SD16を切っている。長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.2mの東西に長い土坑である。遺物は出土していない。

柵跡（SA）は2基ある。SA31は調査区南西に位置し、4基のピットが並んでいる。対となるピットが認められないことから柵跡とした。調査した長さは6.2mを測るが、西側に延びている

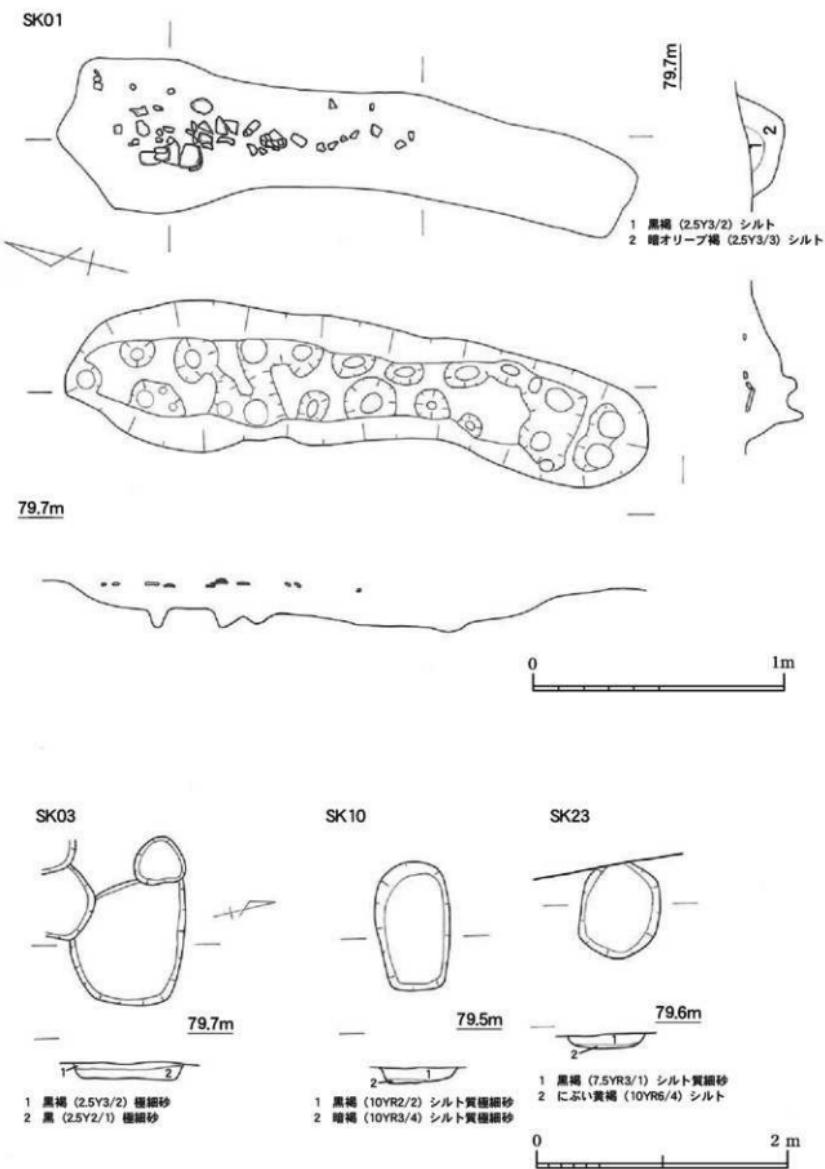


図 27 1区遺構実測図 (1)

可能性はある。柱間は同じでなく、西から 2.3 m, 2.3 m, 1.6 m の心々間距離である。主軸方向は磁北から 45° 振っている。SA32 は調査区中央の溝群南側にある南北方向の柵跡で長さ 10.8 m を測る。調査区南側に延びている可能性がある。主軸方向は N45° E で SA31 と直交する方向を持つ。主軸方向が同じことから、ほぼ同時期の遺構と考えられる。SK01 も同じ方位を探すことから古墳時代前期の遺構ではと考える。西側には旧河道・溝があることからも、調査区東側に小集落の中心がある可能性が高い。

それ以外の遺構として波板状遺構がある。溝に囲まれた部分に幅 0.1 ~ 0.15 m、長さ 0.2 ~ 0.54 m を測る溝状の浅い落ち込みが 3 基並ぶもので耕作痕跡である。また、地山面に足跡が比較的多く見られる。人と偶蹄目（ウシカ）と鳥の足跡が確認されている。



図 28 1 区西侧空中写真

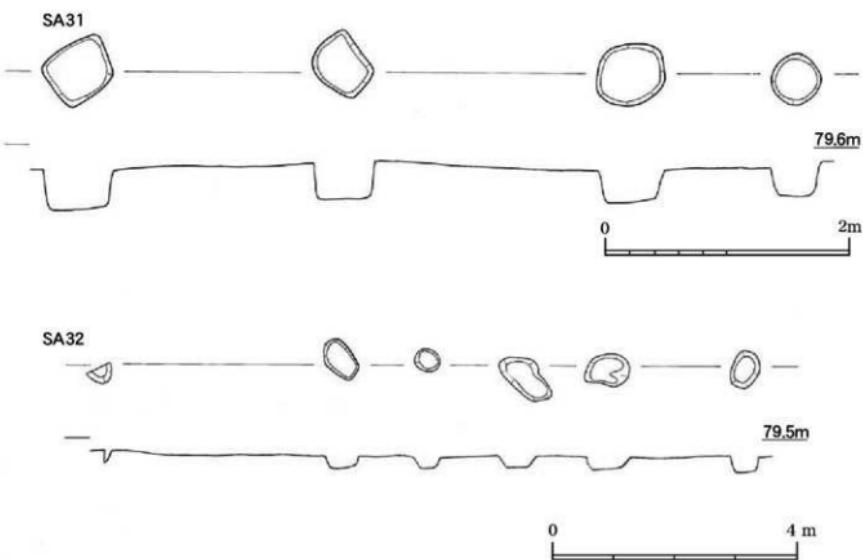
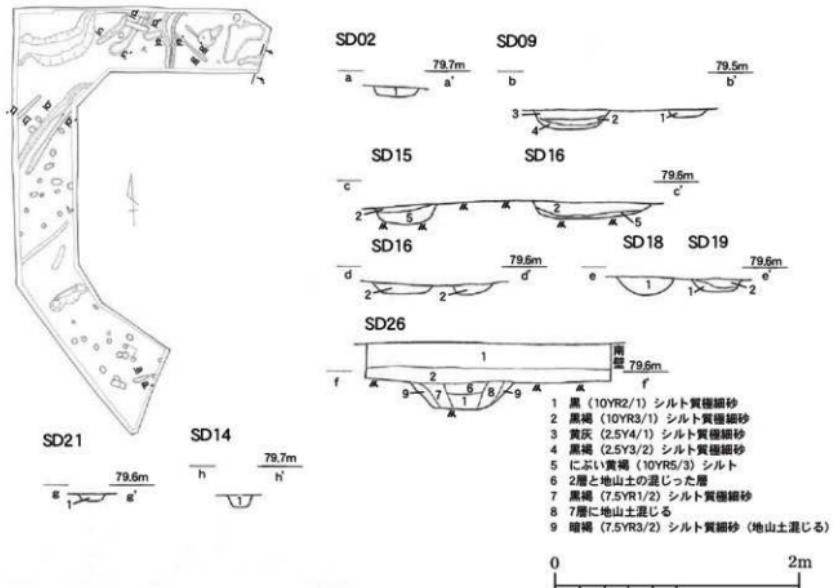
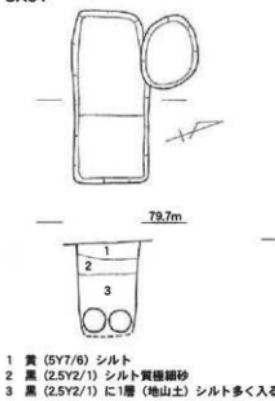
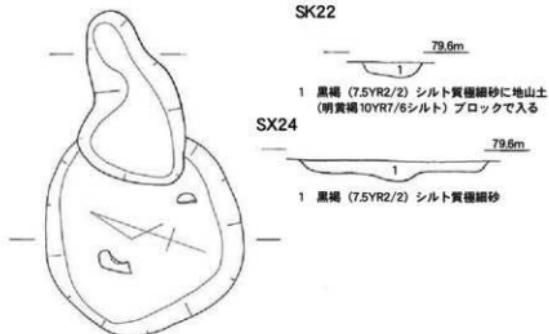


図29 1区遺構実測図(2)

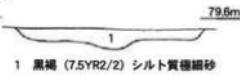
SX04



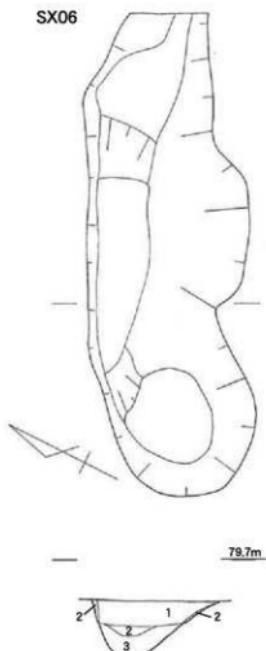
SK22



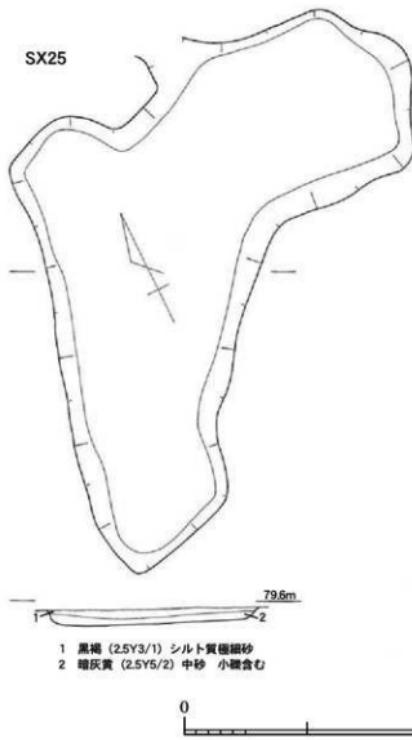
SX24



SX06



SX25



- 1 黒 (7.5YR1.7/1) 極細砂
2 黒褐 (7.5YR3/2) シルト質極細砂
3 黒 (10YR2/1) シルト質極細砂

図 30 1区造構実測図 (3)

〈2区〉

1区南側道路部分の東側に位置し、東西5m、南北6mの30mを測る調査区である。層序は4層から成る。第1層は耕土、第2層は黒褐シルト質極細砂、第3層は灰黄褐シルト質極細砂、第4層は黄シルト（地山）である。地山面だけで遺構を検出した。遺構は土坑・落ち込みとピットを確認している。耕土直下（2層上面）から掘り込まれている落ち込みと3層上面から掘られる土坑・ピットに分けられる。土坑は東壁沿いで調査区東へ続いている。幅0.64m、深さ0.2mを測る。北壁沿いに大形の落ち込みがあり、最大長2.8mを測る。上面に粘土を敷いている。1区SX04と同様の粘土であり、床土下から掘り下げていることから同一時期の同種の落ち込みと考えられる。地山面には1区と同じく足跡が残されている。土坑・ピットは第3層上面から掘り下げられており、遡っても中世後半で、近世にかけての時期と思われる。落ち込みは第2次世界大戦の時期である。

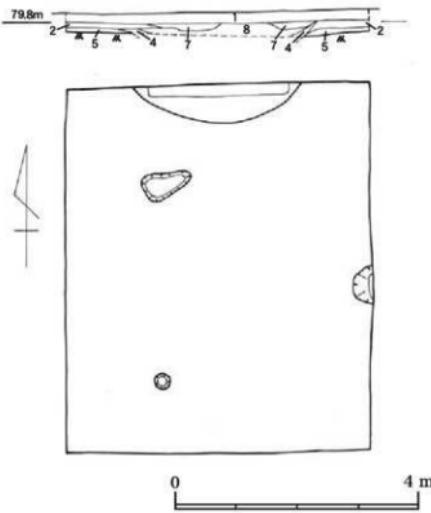


図3-1 2区実測図

〈3区〉

1区北側道路部分の東側に位置する。道路予定部分が現状の水路にまたがっているため、道路予定幅を調査することは不可能だったので、幅のある北側部分に調査区を設定した。南北2m、東西9mの18m²である。基本層序は耕土、灰黄褐シルト質極細砂（床土）、黒褐シルト質極細砂、灰黄褐シルト質極細砂、黄シルト（地山）の5層である。遺構面は2面あり、第3層の黒褐シルト質極細砂から掘り下げられた遺構（土坑・溝）と第4層の灰黄褐シルト質極細砂から掘り込まれた遺構（溝・ピット）がある。下面是奈良時代、上面は平安時代末から鎌倉時代と思われる。また、地山面では足跡を検出した。

上面の土坑は北壁沿いにあり調査区北側に延びている。幅0.95mで深さ0.55mを測り、底は丸くなっている。断面観察で土坑の上に溝状の落ち込みがあるが、堆積段階のものかもしれない。東側にも幅2mの溝状落ち込みがある。下面の遺構は溝とピットで、溝は調査区東側に続いている。幅1.4m以上で深さ0.25mを測る。ピットは7基確認した。東側3基は並んでおり、掘立柱建物と思われる。柱間は1.8mで東側に続いている可能性があるが、西側には延びずに、地形的に見て北側に広がる建物である。

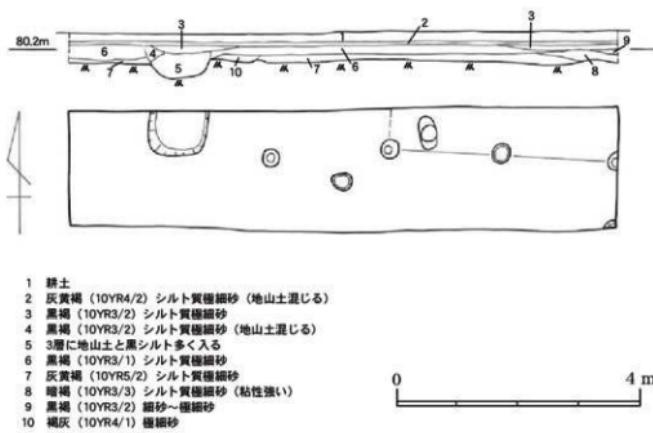


図 3-2 3 区実測図

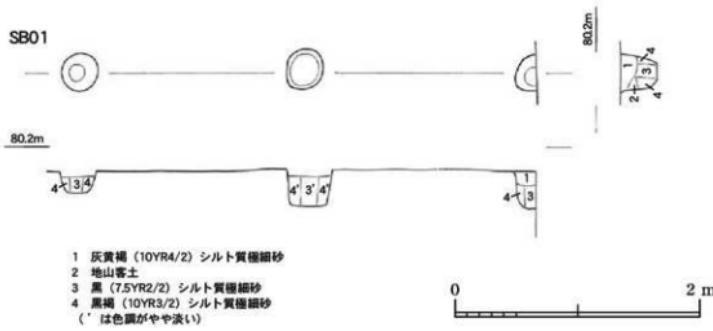


図 3-3 3 区SB01 実測図

第4章 出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器が出土している。遺物量はコンテナ5箱と少ない。図化した土器は27点であるが、弥生時代末から古墳時代前期の土器に限られている。土坑と旧河道から主に出土している。

SK01 出土土器

13点図化した。1～3は壺である。1は稜線の甘い二重口縁であり見ない形態である。外反する頸部から内傾し口縁部になり、端部は内側に尖っている。器壁は薄く、胎土は一地元（市川流域）のものと思われる。2・3は突出平底の底部である。2は粗いハケ整形（貝殻かもしれない）のうちナデ仕上げを行う。外面は被熱している。3は底径8cmと大形で強く焼けている。内湾する形状で、外面はヘラミガキ、底面もヘラ調整を加えている。胎土は精良である。

4～11は甕である。4は強く外反する口縁部で端部は下方へ尖る。体部外面はタタキ成形で、内面はナデである。口縁部はハケ整形で端部周辺はヨコナデである。粘土紐の継ぎ目が見られる。5は外傾し端部は角張る。ヨコナデ調整である。6は緩く外反し端部を少しつまみ出し端面が凹んでいる。7はタタキ成形のうち口縁部を作り出したもので口縁部にもタタキが残っている。外反し、頸部内面はユビ押さえが見られ、端部周辺はヨコナデである。8は外傾する口縁部で端部上方につまみ上げている。タタキ成形のちヨコナデである。9もタタキ成形のち口縁部を折り曲げたもので、外反し端部が尖っている。10は小形で肩の張る倒卵形の体部から短く外反する口縁部になる。端部は丸いが部分的につまみ上げている。外面はタタキからナデ仕上げで黒斑が見られる。内面はヘラ状工具でナデしている。口縁部は強いヨコナデを施す。11は底部で、平底から外傾する体部に続く。器壁はやや厚めで、外面はタタキ成形である。内面はヘラケズリのうち工具を使ってナデしている。底面には木葉痕の上に工具痕が見られ、タタキ底かもしれない。さらにナデ整形している。

12は精製土器で器台上台部と思われる。内湾し端部は丸い。ハケが少し見られるが、ヨコナデ仕上げである。

13は高杯杯部で外面に稜線を有する。外反する口縁部で端部は丸い。外面に「ハ」のヘラ記号が見られる。

旧河道出土土器

14点図化した。14は壺頸部で緩やかに開く体部に続く。二重口縁になる可能性もある。外面はヘラミガキである。15は甕口縁部で内湾する体部から外反する口縁部になり端部は角張る。端面は中央が凹んでいる。外面はタタキ、内面はナデ、端部周辺はヨコナデで仕上げている。

16～25は底部である。16は平底から内湾し倒卵形の体部になると思われる。外面はタタキ成形で底面は仕上げを行っていない。内面はユビ押さえからナデ整形である。タタキ成形が強いため底部面になっている。17は突出平底で、外面はタタキ成形で内面には工具痕が残る。底面が赤色に変色している。化粧土を塗布したかもしれない。18は上げ底で底面は薄くなっている。タタキのうちユビ成形を加えている。19はタタキ成形で外面に黒斑が認められる。20は底部再成形で底面にユビ押さえが見られ、断面は歪になっているが丁寧な仕上げである。タタキ成形からナデ整形している。やはり黒斑が見られる。21は大形の底部で平底だが中央が少し上がっている。外面タタキ成形で内面と底面はナデである。外面に黒斑がある。22は磨滅が顕著であるが、外面はタタキである。内面には工具痕が残る。23は平底から稜線を持たずに内湾する体部に続く。24・25は磨滅が著しい平底である。20・21は壺であろう。

26・27は高杯脚部である。外傾し中空の脚部である。内外面ともヘラミガキである。

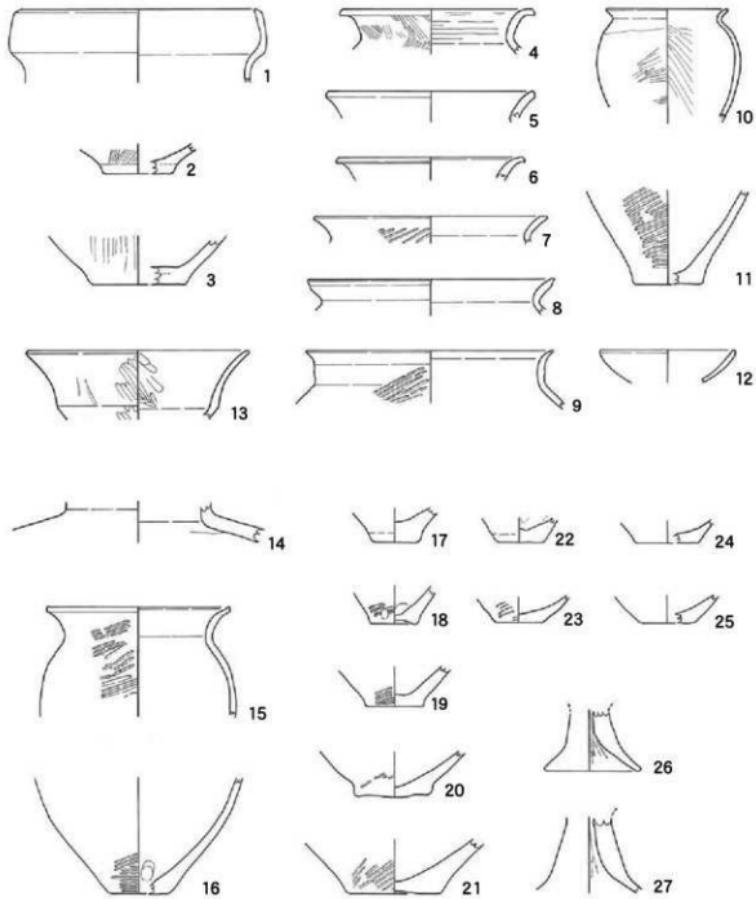


図3-4 遺物実測図

番号	種別	遺構	坪No.	法量(cm)			調整		備考
				口径	器高	底径	外	内	
1	土師器	壺	SK01	(19.0)	(6.0)				
2	弥生土器	鉢	SK01		残2.5	(5.4)	ハケメ	ナデ	
3	弥生土器	壺	SK01		残4.0	(8.0)	ヘラミガキ	ナデ	
4	弥生土器	甕	SK01	(16.6)	残3.7		ハケメ タタキ	ハケメ	
5	弥生土器	甕	SK01	(16.8)	残2.6		ヨコナデ	ヨコナデ	
6	土師器	甕	SK01	(15.0)	(1.9)				
7	弥生土器	甕	SK01	(19.0)	残2.3		タタキ	ヨコナデ ユビオサエ	
8	弥生土器	甕	SK01	20.0	残3.0		ヨコナデ	ヨコナデ	
9	弥生土器	甕	SK01	(20.0)	残4.8		タタキ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	
10	土師器	甕	SK01	10.0	残9.3		タタキのちナデ		
11	弥生土器	甕	SK01		残7.7	(5.8)	タタキ	工具痕あり	
12	土師器	鉢	SK01	(11.0)	(2.7)		ヨコナデ	ハケメ	
13	弥生土器	高杯	SK01	(18.0)	残5.6		ミガキ	ミガキ	
14	土師器	壺	旧河道		残3.3		ヘラミガキ	ナデ	
15	土師器	甕	旧西道路東壁	(15.0)	残9.0		タタキ	ナデ	
16	土師器	甕	旧河道		残9.5	(5.0)	タタキ	ユビオサエ ナデ	
17	土師器	甕	旧河道		残9.9	3.9	タタキ	工具痕あり	
18	土師器	壺	旧河道		残3.1	3.6	タタキのちユビオサエ	ユビオサエ	
19	土師器	甕	旧河道		残2.9	(4.6)	タタキ		
20	土師器	甕	旧河道		残3.7	6.4	タタキ		
21	土師器	甕	旧河道		残4.1	(7.8)	タタキ		
22	土師器	甕	旧河道		残1.9	3.5	タタキ	ユビオサエ 工具痕あり	
23	土師器	甕	旧河道		残2.3	3.8	タタキのちナデ	工具痕あり	
24	土師器	甕	旧河道		残1.6	(5.2)	ナデ	ナデ	
25	土師器	甕	旧河道		残2.3	(4.8)	ナデ	ナデ	
26	土師器	高杯	旧河道		残5.1	(1.9)			
27	土師器	高杯	旧河道		残6.1	(8.6)	ヘラミガキ		

表4 土器観察表

第5章 小結

今回の調査の結果、弥生時代末から中世に至る複合遺跡であることが明らかとなった。旧河道 (SR13) と土坑 (SK01) が弥生時代末から古墳時代初頭の遺構である。柵跡も主軸方向がSK01と同じことから同時期の可能性が高く、1区北側道路部分の多くの遺構もこの時期と思われる。今まで西側の南田原条里遺跡や北側の北野散布地などで確認されていたが、西田原上野田遺跡もこの時期から生活を始めたことが明らかとなった。大きな集落を構成せず、小規模な集落と思われる。連続と継続して遺構は確認されず、断続的に中世後半まで生活を続けていることが明らかとなった。

III 西光寺中遺跡第1次

第1章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

当該地は、市川東岸に位置し、市川によって形成された段丘面にある。町内の桜上池から姫路市豊富町までが西光寺野台地と呼ばれており、江戸時代から開発が進められてきた地域である。周辺には河川が流れてもおらず、市川町の岡部川から水を引いてきている。

西側では地形が落ちており、市川等の氾濫原となっている。

第2節 歴史的環境

西光寺野台地上には、弥生時代の遺跡である南田原中野田遺跡（2）、西光寺遺跡（3）、桜田遺跡（5）が所在する。いずれも散布地であり、これまで発掘調査は行われていない。南田原中野田遺跡は『福崎町史』によると、遺跡の大半が土取りで消滅したそうだが、弥生土器が表採されており、弥生時代後期後半の遺跡であると考えられる。また、吉備系の土器も含まれており、交流関係があったことが推測される。

西光寺遺跡は、有舌尖頭器が表採されたことから縄文時代の遺跡とされている。桜田遺跡は弥生時代の散布地とされているが調査歴はなく、各遺跡の詳細は不明である。小字が西光寺であることから、西光寺という寺院がこの近辺にあったと推測される。

調査対象地区の北西に位置する寶性院内には、家形石棺1点の他、小型の石棺が2点存在し、周辺に古墳があったことを示唆するが、西光寺野開墾により、消失してしまった可能性がある。また、周囲に周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されていないことも、それが原因と考えられる。

南田原条里遺跡は氾濫原に位置しているが、微高地では遺構が確認されている。今まで45回の調査が行われており、弥生時代の溝や旧河道、古代のピットなどが検出されており、弥生時代の土器、石包丁等が出土している。また、奈良時代の掘立柱建物も検出されており、柱穴の大きさや稜楌が出土していることなどから官衙的な遺構として位置付けられている。第39次調査では、奈良時代の溝、土坑、ピット、杭跡が確認されている。



図35 寶性院石棺



図3.6 西光寺中遺跡周辺の遺跡分布図

1	西光寺中遺跡	2	南田原中野田遺跡	3	西光寺遺跡	4	南田原条里遺跡
5	桜田遺跡						

表5 遺跡地名表

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

①開発計画

準公民館新築工事に伴う事前調整があり、小字が西光寺であることから、寺院の痕跡や寺院跡が発見される可能性があったため、協力を得て試掘調査を行った。

②試掘調査

平成30年1月4日（木）に準公民館新築工事に伴って、予備調査依頼書が提出されたため、平成30年1月17日（水）に試掘調査を行った。

建物建築予定地にトレンチを2箇所設定した。

建物建設予定地北西側に設定した1トレンチは、第1層は黒褐シルト質砂礫、第2層は橙シルト質細礫、第3層は褐シルト質極細砂、第4層は暗褐シルト質細砂（第3層の土含む）、第5層は明褐シルト、第6層は地山で明褐シルト（礫含む）である。



図 3.7 試掘調査トレンチ配置図

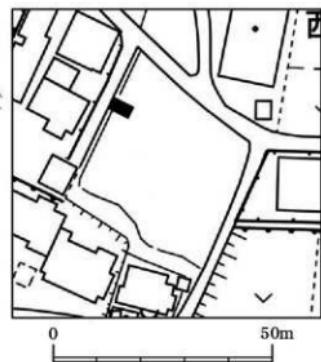


図 3.8 本調査区の位置

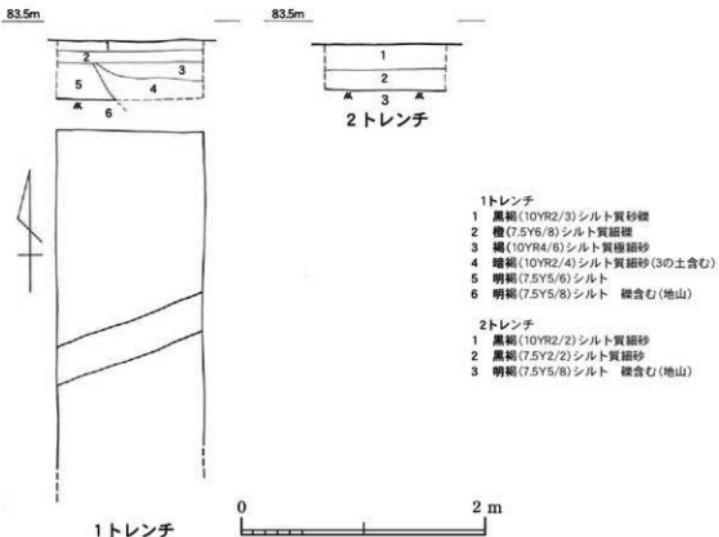


図 3.9 試掘調査実測図

第5層に溝状遺構が確認された。第1層下面から土師器片が出土した。
建物建設予定地南東側に設定した2トレンチは、第1層は黒褐シルト質細砂、第2層は黒褐シルト質細砂、第3層は地山で明褐シルト質（礫含む）である。遺構、遺物は確認されなかった。
この調査により、1トレンチの北側で溝状遺構が確認されたため、事業主と協議のうえ、建物新築により遺構が破壊される箇所について、本発掘調査を実施することになった。

第2節 調査の経過

試掘調査の結果に基づき事業主と協議を行ったところ、事業主が工事業者に重機掘削作業を依頼し、教育委員会が指導しながら調査を実施するという方法を探った。平成30年1月17日（水）の1日間で本発掘調査を実施した。調査にあたっては、重機で耕土、床土を除去して遺構面上まで掘削し、人力により精査を行って遺構面を検出した。図化及び写真撮影等の記録後、埋め戻しを行った。

第3章 調査結果

第1節 調査の概要

試掘調査結果をもとに事業主と協議をし、掘削を伴う建物建築部分について本発掘調査を実施した。調査は平成30年4月10日（火）の1日間に実施した。調査面積は21m²である。発掘調査については福崎町教育委員会が調査主体となり、事業主が準公民館新築施工業者へ重機掘削の作業委託をし、実施した。

試掘調査結果を踏まえて上層については機械掘削により除去し、包含層・遺構面については人力により対応した。

層序は、第1層が表土、第2層は黄褐シルト質粗砂、第3層は地山である明褐シルト（礫含む）である。

第2節 遺構

試掘調査において溝状遺構が検出され、新築建物の範囲内に延長すると考えられたため、本発掘調査を実施するに至ったが、想定される範囲内に溝状遺構が確認されなかつたため、調査区北側の断ち割りを行ったところ、調査区北東隅から遺構の断面が確認された。

確認された遺構は溝状遺構で、調査区の北側に延びている。断面から判断すると、幅1.5mの溝が埋まつた後、幅0.75mの溝が作られたと考えられる。埋土の状況から、後の溝は試掘調査時に検出した溝と同じものと考えられ、直線状に延びているのではなく、調査区外で南側にカーブしているものと思われる。

埋土から土師器片が確認されたが小片のため時期は不明である。

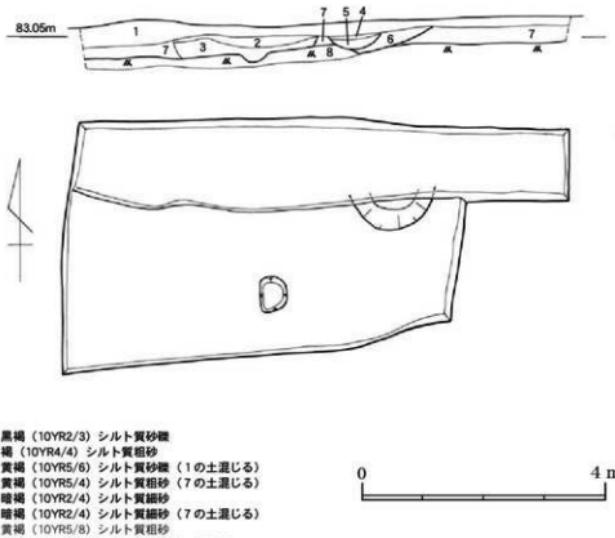


図40 本調査実測図

第4章 小結

今回の調査では、溝状遺構が確認された。調査区の北側に延びていることから、遺跡は北側に広がっていると考えられる。また、寶性院に近接しており、字名が西光寺であることから、寺院関係の遺構の可能性がある。

報告書抄録

ふりがな	きたのさんぶち (だい5じ)・にしたわらかみのだいせき (だい4じ)・さいこうじなかいせき (だい1じ)
書名	北野散布地（第5次）・西田原上野田遺跡（第4次）・西光寺中遺跡（第1次）
副書名	
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	18
編著者名	樋口 碧・渡辺 翼
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1 TEL 0790-22-0560
発行年月日	2020年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積 m ²	要因
		市町村	遺跡番号					
きたのさんぶち 北野散布地 (第5次)	ひょうごけんかみのくじかくふくさくじゆうしきにしたわら 兵庫県神崎郡福崎町西田原 あざけんくみのくじかくふくさくじゆうしきにしたわら 字西光寺968、965-1の一部	28443	410113	34度 57分 21秒	134度 46分 6秒	2017年 4月25日～ 4月28日 5月11日 (4日)	250	集合住宅 建設
にしたわらかみのくじ 西田原上野田遺跡 (第4次)	ひょうごけんかみのくじかくふくさくじゆうしきにしたわら 兵庫県神崎郡福崎町西田原 あざけんくみのくじかくふくさくじゆうしきにしたわら 字上野田1828番地	28443	410091	34度 57分 9秒	134度 46分 03秒	2018年 4月3日～ 4月13日 (9日)	410	宅地造成
さいこうじなかいせき 西光寺中遺跡 (第1次)	ひょうごけんかみのくじかくふくさくじゆうしきにしたわら 兵庫県神崎郡福崎町南田原 あざけんくみのくじかくふくさくじゆうしきにしたわら 字西光寺1382-3他	28443	410141	34度 56分 38秒	134度 46分 1秒	2018年 4月10日 (1日)	21	公民館 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北野散布地 (第5次)	集落	弥生 古墳 平安	竪穴住居 掘立柱建物 櫛列	弥生土器 須恵器 土師器	
西田原上野田遺跡 (第4次)	集落	弥生 古墳	溝 土坑 旧河道	弥生土器 須恵器 土師器	
西光寺中遺跡 (第1次)	集落	中世	溝	土師器	

写 真 図 版

図版 1

北野散布地確認（第4次）調査



調査地全景（南から）



調査区全景（北東から）



坪1 機械掘削



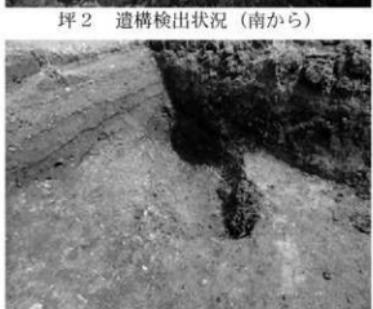
坪1（南から）



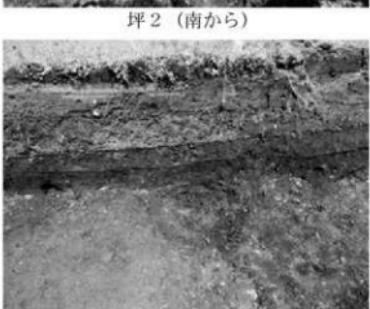
坪2 遺構検出状況（南から）



坪2（南から）



坪2 溝（南西から）



坪2 土坑（南から）

図版2



坪2 調査風景

北野散布地確認（第4次）調査



坪2 調査風景



坪2 埋戻し



坪2 調査風景



坪3 (南から)



坪3 (北から)



坪3 埋戻し



坪3 埋戻し



全景（北から）



全景（南から）

図版 4



機械掘削

北野散布地第5次調査



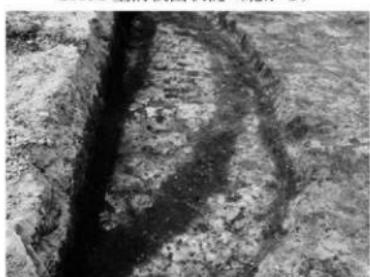
調査風景



SH02 壁溝検出状況（北から）



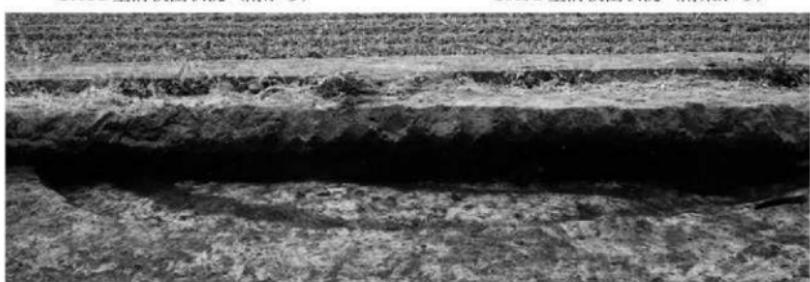
SH02 壁溝検出状況（北東から）



SH02 壁溝検出状況（南から）



SH02 壁溝検出状況（南東から）



SH02 西壁

図版 5



SH02 (北から)



SH02 (北東から)



SH02 (南から)



SH02 (南東から)



SH02 調査風景



SH02 壁溝断面



SH01 (北から)



SH01 (南から)

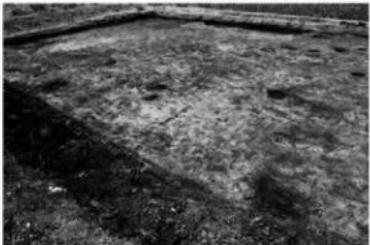
北野散布地第5次調査

図版6

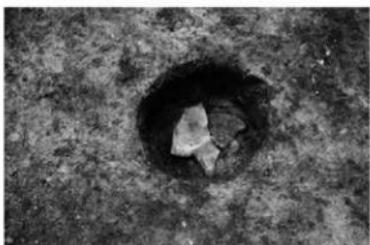
北野散布地第5次調査



SB01 (北西から)



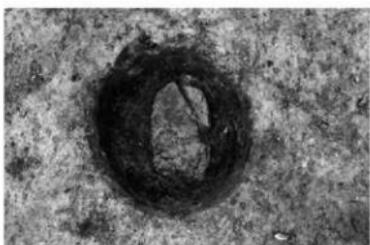
SB01 (北東から)



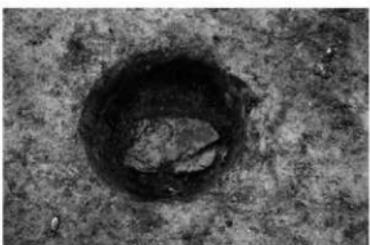
SP01 土器出土状態 (南から)



SP01 土器出土状態 (西から)



SP01 磁板 (南から)



SP01 磁板 (東から)



SP01 実測風景



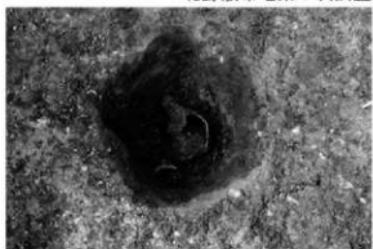
SP05 (西から)

図版 7

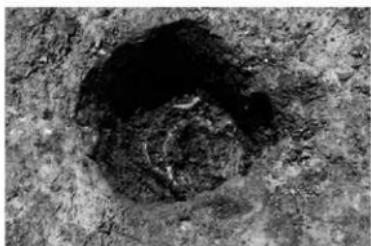


SP15 土器出土状態（南から）

北野散布地第5次調査



SP15 土器出土状態（南から）



SP15 土器出土状態（東から）



北西部ピット群（東から）



SA02（北から）



SA02（南から）



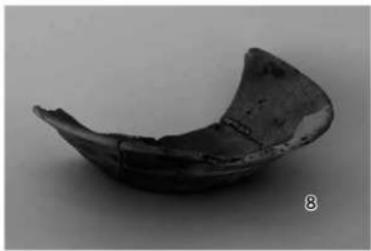
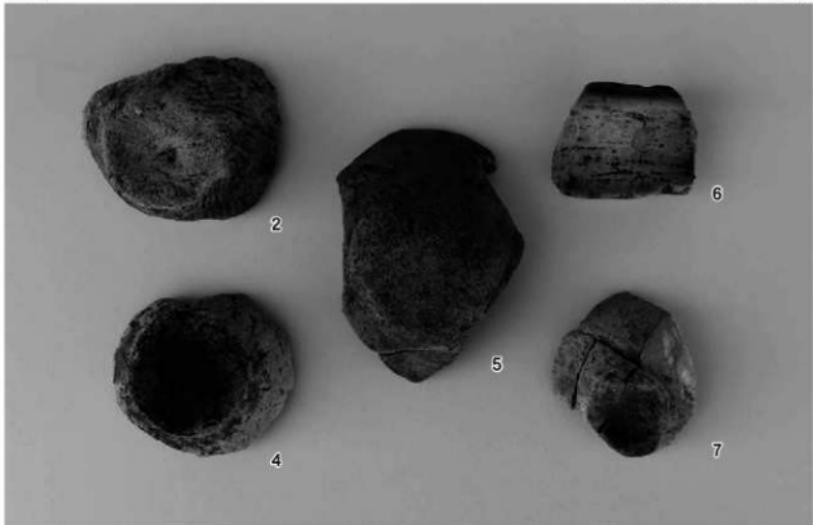
擁壁部分（南から）



埋戻し

図版8

北野散布地 出土遺物





調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



坪1 機械掘削



坪1 人力掘削



坪1 調査風景



坪1（南から）



坪2（南から）



坪3（南から）

図版10



坪4 調査前

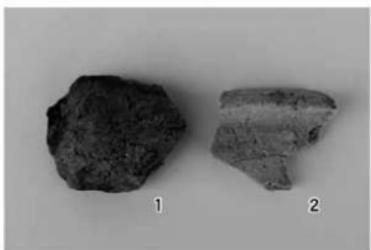
西田原上野田遺跡第3次調査



坪4 (南から)



坪5 (南から)



出土遺物



1区空中写真 (東上空から)

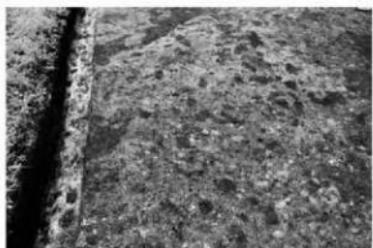
図版11



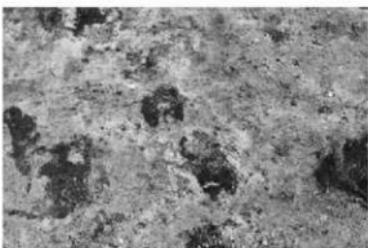
バックホー搬入状況



機械掘削



足跡検出状況



足跡検出状況



人力掘削



SK01 土器検出状況



1区南半全景 (東から)



1区南半全景 (北西から)

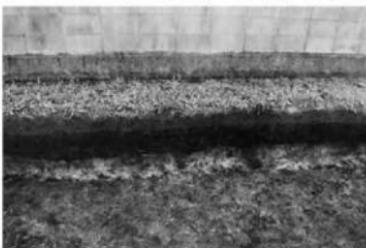
西田原上野田遺跡第4次調査

図版12

西田原上野田遺跡第4次調査



1区南壁



1区南壁（部分）



1区東壁（部分）



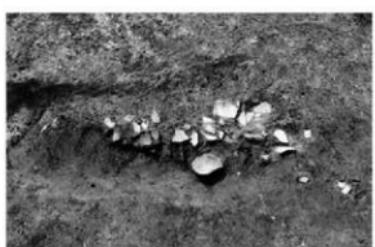
1区東壁土器出土状態



SK01断面（南東から）



SK01土器出土状態（北西から）



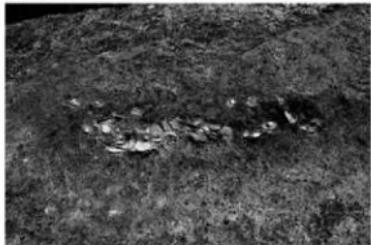
SK01土器出土状態（南西から）



SK01土器出土状態（北西から）

図版13

西田原上野田遺跡第4次調査



SK01 土器出土状態 (北東から)



SK01 土器出土状態 (東から)



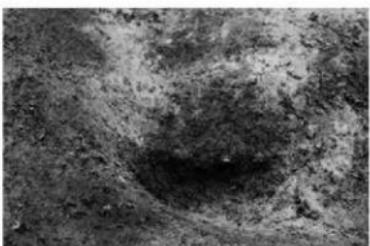
SK01(南東から)



SK01 (北西から)



SK01 底ピット検出状況



SK01 底ピット断面

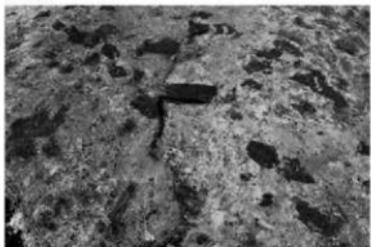


SK01(南東から)



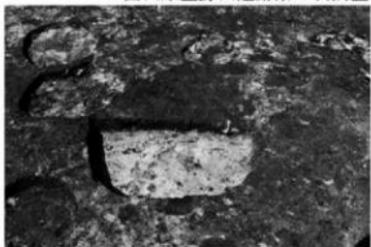
SK01(北東から)

図版14



SD02 アゼ（北から）

西田原上野田遺跡第4次調査



SK03 断面（東から）



SX04 断面（東から）



SX04 断面（東から）



SX06 アゼ（南から）



SX06（南から）



SD14 断面（南西から）



SD08・09（北東から）



1区西侧道路部分（南から）



1区西侧道路部分（北から）



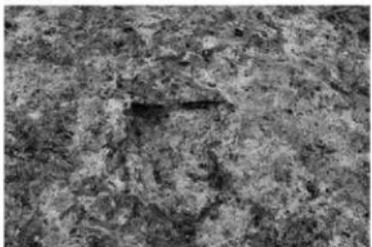
実測風景



SD09 北アゼ（北東から）



SK10 断面（南東から）



SK11 断面 (東から)



SK12 断面 (北から)



旧河道全景 (南東から)



旧河道上面土器出土状態



旧河道西壁



旧河道北壁



旧河道調査風景



シート養生

図版17



1区北側道路部全景（東から）

西田原上野田遺跡第4次調査



1区北側道路部全景（西から）



SD15・16アゼ（南西から）



SD16アゼ（南西から）



SD15～18・28・29（北東から）



SD16・17アゼ（南から）



SD16土器出土状態（南から）



SD18・19（北から）



SD18・19の切り合い (北から)



SD21周辺足跡



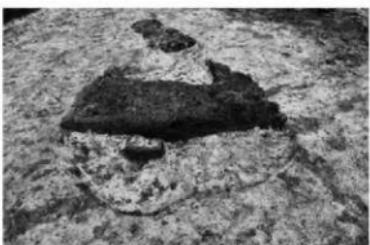
SD21アゼ (南東から)



SK22断面 (南西から)



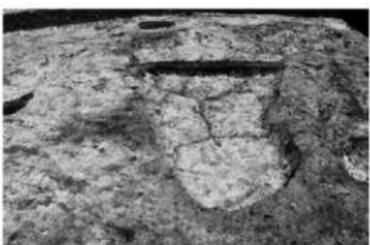
SK23断面 (南から)



SX24断面 (南西から)



SK22・SX24 (南西から)

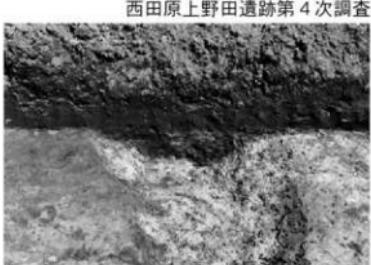


SX25アゼ (南から)

図版19



SD26（西から）



SD26 断面



SD29（西から）



北壁実測風景



1区埋戻し



1区埋戻し後（東から）



1区西道路部空中写真



1区北道路部空中写真

西田原上野田遺跡第4次調査



空中写真



1区空中写真（東上空から）

図版21

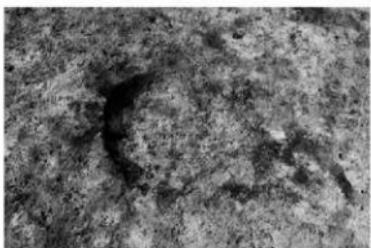


2区全景（南から）

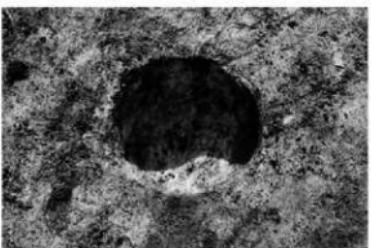
西田原上野田遺跡第4次調査



2区全景（西から）



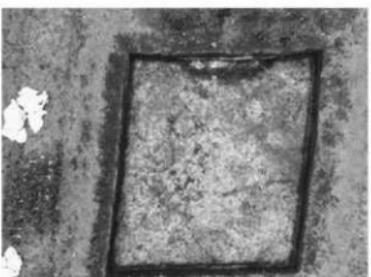
SP01（南から）



SP02（南から）



2区シート養生



2区空中写真



2区埋戻し後（南から）

図版22



3区調査前（西から）

西田原上野田遺跡第4次調査



3区機械掘削



3区人力掘削



3区シート養生



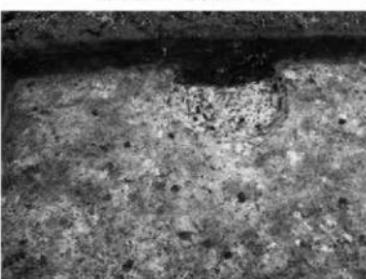
3区全景（西から）



3区全景（南東から）



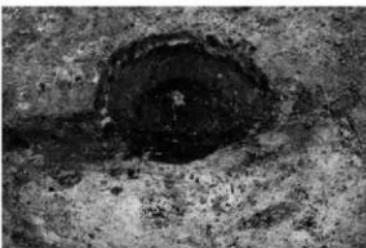
SK01（南から）



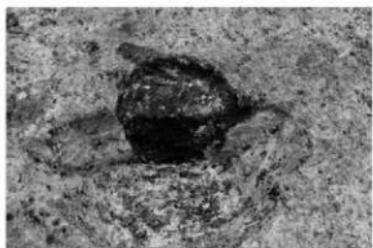
足跡



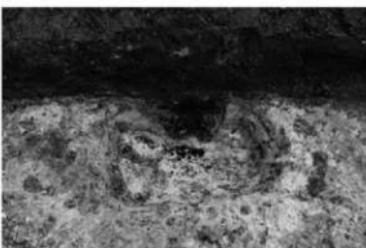
SP01 断割り（南から）



SP02 断割り（南から）



SP03 断割り（南から）



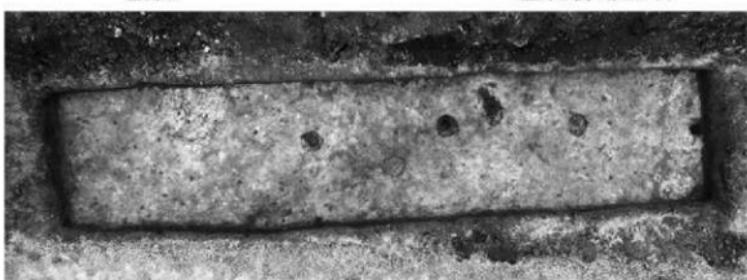
SP04 断割り（西から）



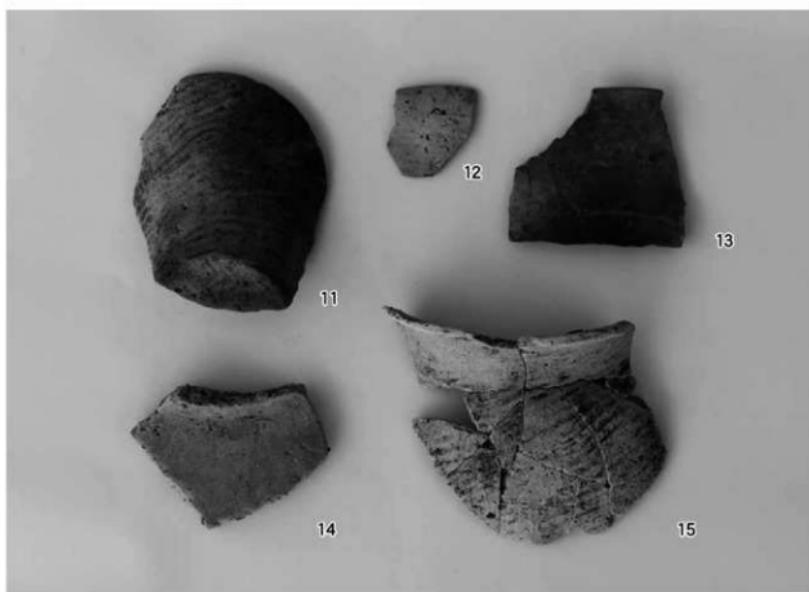
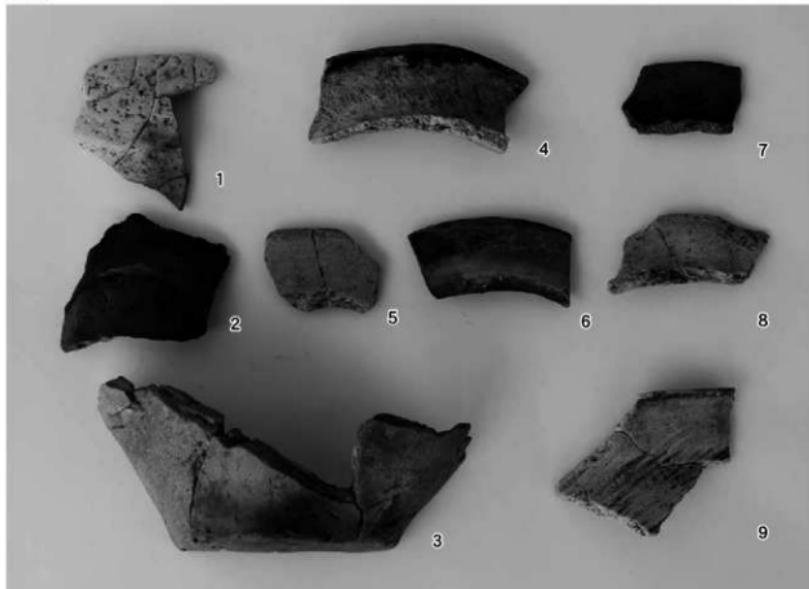
埋戻し



埋戻し後（西から）

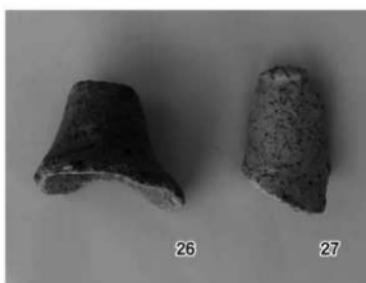
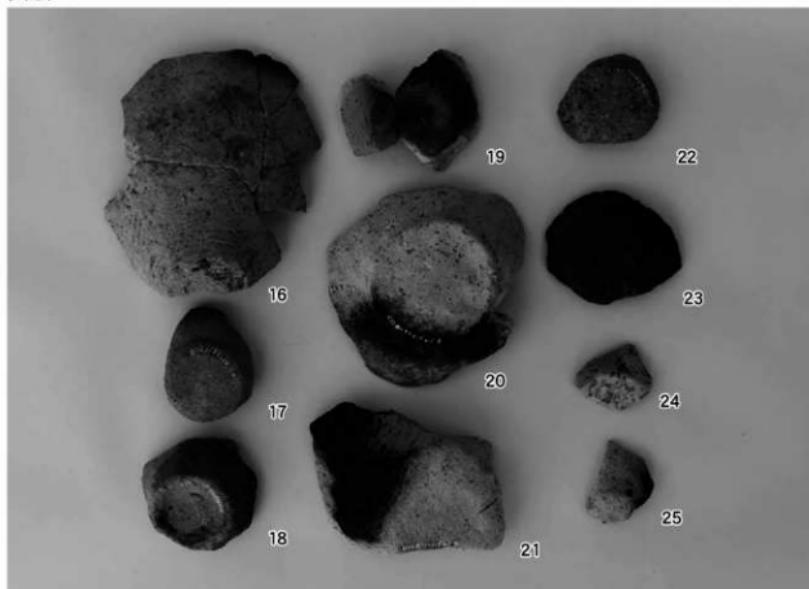


3区空中写真



図版25

西田原上野田遺跡 出土遺物



図版26



調査前（南東から）

西光寺中遺跡第1次調査



機械掘削



人力精査



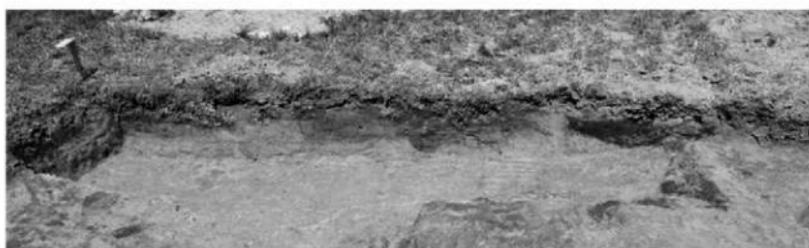
完掘状況（南から）



溝状遺構断面（南から）



調査区全景



北壁（南から）

2020年3月31日 印刷
2020年3月31日 発行

埋蔵文化財調査報告書
北野散布地（第5次）・西田原上野田遺跡（第4次）・
西光寺中遺跡（第1次）
福崎町埋蔵文化財調査報告18
編集・発行 兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1
福崎町教育委員会

印 刷 クリヤ印刷所